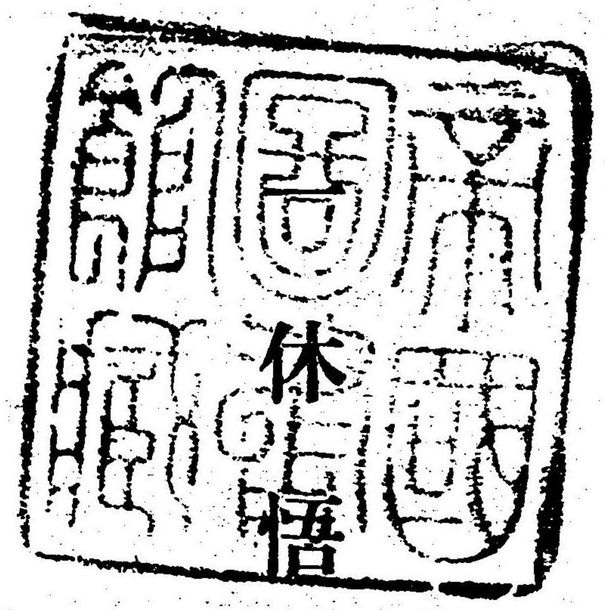
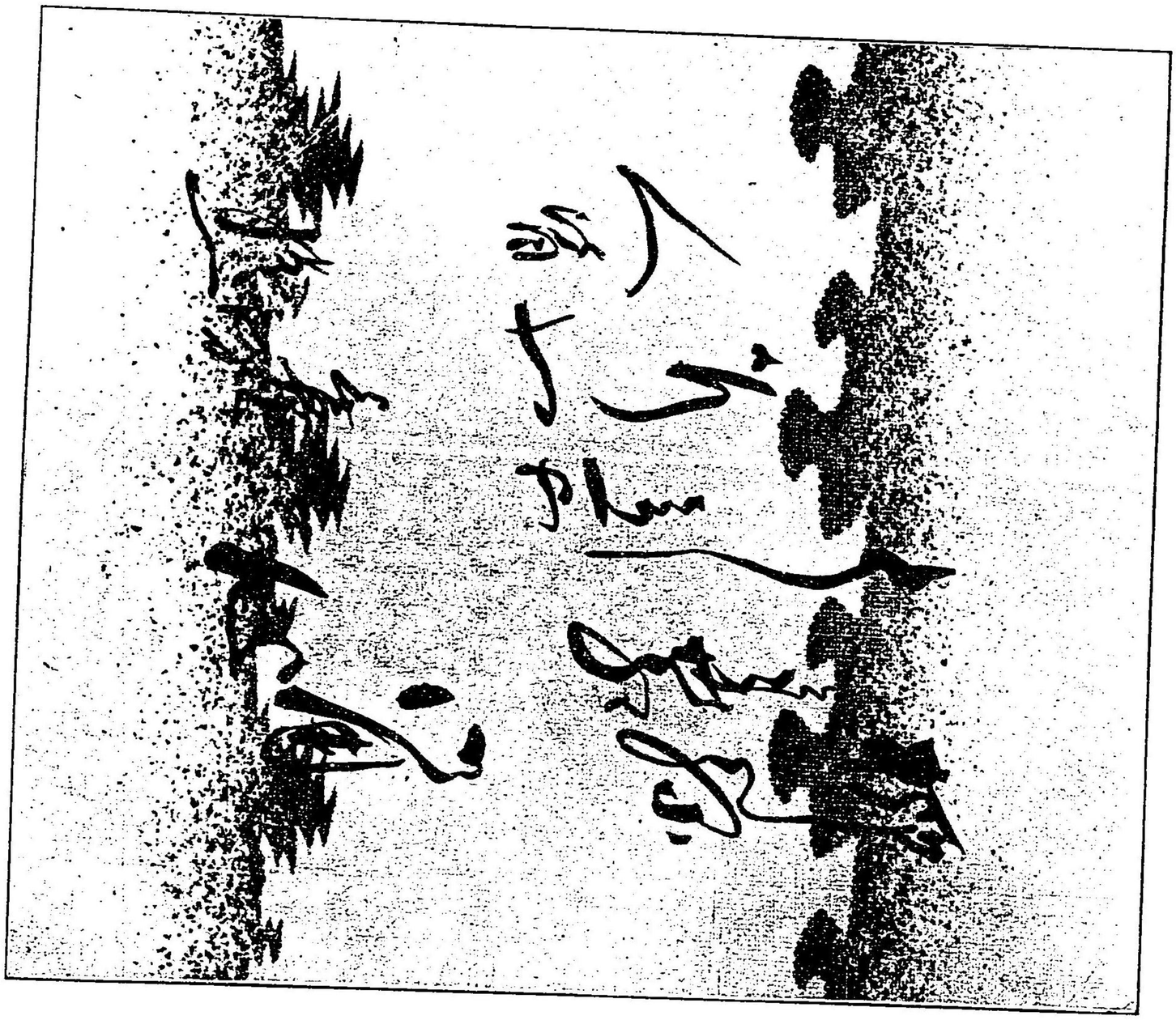
特63
809




# 道錄



## 味噌一言

理屈なんぞ解らないから廢して、世にめちや〳〵に面白い坊さんは一休和尚だ。

理屈なんぞは解らないから廢して、世にめちや〳〵に面白いものは浪花節だ。

其めちや〳〵に面白い坊さんをとらまいて、其めちや〳〵に面白い浪花節の調子で書いて見たのが此本だ。

理屈を廢してめちや〳〵に面白いものを二ッ結むで、ントコサと筆を躍らせたのだ。

そも其調子なるものが、曰く、やつて來たつたと言ふかと思ふと、なりにけりと來る、然樣かと思ふとそりやきこへませぬてな處もある。

誰れが何んと言つたつて遣麼めちやくに面白い本が又とあるべきものでない。

大いに自慢すること然り。

辛亥春

冥途の旅の一里塚立つ時　曉紅生

# 休悟道錄目次


一　道實何者ぞ菊麿君の即吟……一
二　七歳にして大悟出家遁世……九
三　宗純道理をせめて後向きの讀經……一七
四　警句一番革羽織を叩いて走らす……二五
五　仕返しの難題小鳥の引導……三三
六　宗純得々として魚肉の調理……四二

七　兆殿司の難問一笑にして解答……五一
八　白及の下に時の天下を諷す奇答一言……五八
九　朋輩の過失を助けて氣轉の問答……六七
十　雨に得る悟道の歌時に宗純一休と號す……七六
十一　師の坊の入寂に悟の極を問ふ……八四
十二　先住の法會に一萬枚の撒紙……九一
十三　馳走本來是空献立は謎々……一〇〇

十四　父は天地乾坤母は地水火風……一〇七
十五　稱ふ人を以て答へと爲す地獄極樂……一一七
十六　學寮の難題三千枚へ一字の揮毫……一二六
十七　紙を布く十八間筆を執つて麓へ走る……一三五
十八　蓮臺野菰垂の茶の會……一四四
十九　知りて不言、龜を叩いて奇拔の引導……一五二
二十　燈籠の詩に寄す一冊の誡戒……一六一

廿一　禪師用意の晴れ衣裝盆踊の風諫……一七
廿二　將軍忽ち推して癡止の御沙汰……一八
廿三　漫遊の出立、少し待てモウ一杯……一八
廿四　尿して驚かす地藏の開眼……一九
廿五　佛罰の平癒は有難き越中褌……一九
廿六　赤鬼忽ち變じて青鬼となる……二〇
廿七　渾々と眠むられる中に知る禪師入來……二一
廿八　住吉の風韻ゆかし名僧と歌人……二四
廿九　禪師の頓智狂者に與ふ道歌一首……二三
三十　難解又難解地獄太夫も遂に解せず……二四
卅一　意味の不可解は不可解の意味……二四
卅二　年賀の廻禮に竹の先の闕髏……二五


一休悟道錄目次終

# 一休悟道錄

## 一

『門松は冥途の旅の一里塚。目出度もあり目出度もなし、人間本來是空と明けの元日しやれ頭へ、悟り澄した竹の先、竹の園生のやどとなる、身を徹底の製法衣、俗を脱して俗の世に、教化別傳不立文字、奇行諧謔頓才頓智、中に諭して無量なる一休和尚が禪の奥、時に鉢卷踊りも踊り、四方のあからが達摩の賛から〳〵喝つとお笑

曉紅生編

ひの、其滑稽に濟度の妙、いざや開かん悟道錄』

稀代の名僧一休禪師、此御方は南朝後龜山帝に深き御寵愛を蒙りたる、小町の局と申上げた御方の御腹に宿られたのでムいまして、御誕生は應永の元年十二月廿八日、御幼名を菊麻呂と申上げました御成長に從つて實に凡ならぬ御發明、母君小町の局に於ては此上なき御悅びでムいましたが、此方世を早ふ致されて菊麻呂樣御幼少の內に御逝去、然れば御乳の人玉枝といふのが御養育申上げて居りまする。

『實に栴檀は二葉より薫しく、蛇は寸にして其兆、分けて尊き育



立柄、一を菊麻呂十を知る。』

實に其賢しい事は並々でない、然れば亦惡戲な事も人一倍秀れて居ります、茲に袴着の御祝も濟みまして。

『御年七才となられたが、夫下樣でいふ憎まれ盛り、御口も達者手も達者、御庭に出ては木に登り、池の周圍を駈巡る、附添ふ人々お乳の人、傍で見る目も氣が氣でない。』

或雪の日の事でムいます、今日も御庭へ下りて惡戲をなさらうといふので、見兼た乳母の玉枝は菊麻呂樣に對ひ　玉「若樣マア貴方然樣御惡戲ばかり遊ばさうとせず、玉枝の申上げる言を御聞き遊ばせ

貴方は後には立派な御大將樣にお成遊ばすのでムいませう　菊「左樣ぢや　玉「左樣で御在遊ばすなら其樣に御惡戯ばかりなさらず、斯樣な雪の日の御慰みには、チト和歌の道など遊ばしませ、大將樣は御强いばかりでは不可ませぬ、それ〳〵菅原の道實卿と仰有る御方は若樣と同じ御七才の時」

『恰度此樣雪の日に、御側にありし小督の姿、御覽なされて詠まれたは、降る雪が綿々なれば手に溜めて、小督が袖につめたくぞ思ふ。』

玉「如何でムります若樣、豪い御方ではムりませぬか」



『言ふのを聞いた菊麻呂殿、何其麼言わけはない、可愛ゆき頰笑み莞爾と、玉枝の顏を眺められ。』

一体此乳母の玉枝は誠に不容貌でムいまして、色の黑い處からおくろ〳〵と綽名に呼ばれて居ります、そこで菊麻呂殿　菊「なア乳母道實などに麿は負けない。」

『麿が負けてはまろ負けぢや、一首詠むぞと聲高く。』

菊「降る雪がと始めは道實と同じに申すのぢや　玉「はい恐入ります降る雪が……お後は」

『降る雪がお白粉なれば手に溶いて、おくろが顏に塗たくぞ思ふ。』

菊「何うぢや　玉「はッ」

『はッとは云つたが言葉も出ぬ、流石のおくろが赤くなり、腹立られず笑はれもせず、暫し呆されて居りまする。』

菊「イヤ、乳母腹を立てたか、アハ、其方が和歌の道をやれといふからやつたのぢや　玉「何しに乳母が腹など立てませう、其御歌却々道實卿、及ばぬ事恐入りました、若樣が其御才智の勝れさせられる事御母君御在さば如何に御力強く思召給ふでムりませうか。』

『南朝の御帝に仕へ給ひし御母君、今は世を吹く北朝の風、想ひ殘して果られし、其御跡を立てんには、其御才智こそ乞はまほし、御



運の強き足利殿に、南朝無二の誠忠たる楠正成名和長年其他健氣の方々が無念に仆れ給ひしを、想へば君の御生長、時一刻も早かれよ。』

思はず玉枝が云ふ繰言を、お聞きなつた菊麻呂樣、何か感じ入つた体でムいましたが　菊「乳母其楠正成や名和長年等は今何處へ參つて居るのぢや　玉「其人々は此世を去る十萬億土幽冥界へ參つたのでムいます　菊「ウムでは麿も其幽冥界へ行きたいがな乳母伴れて行つて呉れ　玉「これは又如何な言、到底乳母が御案内の出來る處では ムりませぬ　菊「ぢや誰れなら伴れて行つて來れる　玉「其れは僧侶な

らでは適はぬ事でムります　乭「左樣か、で僧侶ならば誰れがよく道を存じて居る　玉「はい……先づ此御案内を致しましようは東山東福寺の兆殿司などでムりませうか然し決して其樣な處は若樣の御出なさる處ではありませぬ　乭「イヤ然うでない、麿は什麼處でも參つて、其楠に會ひ度い、長年に會いたい。」

『幼き胸にも凡ならぬ思案のあるか菊麻呂殿、斯く言出ては却々にあとへ引くべき筈はない。』

乭「乳母、麿は明日東山へ參り、兆殿司に伴れて行つて貰ふ。」



## 二

『あゝ賢しとも賢けれ、僅か御年齡七才の幼き胸の其内に、乳母の玉枝が繰言を聞こし召されて思ふ樣、我南朝の胤なれば、身逝る母や仆れたる忠臣楠名和等が無念を想ひ北朝の代に事擧げよと生長の其曉を待つならむ、其れも道理、さりながらたとへ足利の代とは言へ今は天下も泰平に京洛中は繁昌の、時に事をば起さんは却つて民の憂ひなり、生じ我等の世にあるは人の謀反を導かん、一層今より世を遁れ、出家となりて過ごさんづ然らばや茲に言ひ出て、幽

冥界へ赴いて楠名和に會はふぞと、無理な御言葉其胸は深き思案にお在けり。』

實に菊麻呂樣七才にして斯くまでの御考へ啻聞けば駄々ッ兒の樣な難題、左樣な深き思召のありてとは玉枝の知る虫もありません开處で兎も角も其翌日玉枝を始めお附の者幾人從がふて東山東福寺へ御出掛に相成ました。

『こゝぞ京都東山惠日山東福寺、是都五山寺の一にして、其住職は名に高き道德堅固の兆殿司』

兆殿司は自ら菊麻呂樣御出迎へ申上げ驀て本堂へ御案内　殿「是は



〳〵能うこそ御越遊ばされました、殿司へ何事か御用命にも厶りまするか　菊「オヽ他でもない麿は楠正成名和長年に會ひたうて參つたのぢや、直ぐと案内して呉れ　殿「はッ」

『意外の言葉に兆殿司、流石の智識も早速に返答も出ず當惑の。』

殿「恐れながら其れは冥途と申す處、容易ならぬ道程　菊「如何程遠くとも苦るしふない、早く案内を頼む　殿「はッ」

何しろ厄介な仰せ、殿司も困つたが偶と心着いたのは、

『彼の紫野大德寺にて、過ぐる日負けし問答の、其返報に幸ひぢや此難題を如何解くかこりや、面白しと頷きて。』

殿「冥途へ御供の儀仕り度くはムりますれど、當寺は五山寺の一に致して勅願所にムりますれば、遠々の御供は御用の上に數々の差支生じまする次第、就ては紫野大德寺の華叟ならば必らず御案内申上げる事と存じます、何卒此者へ仰せ附け相成ます樣」

尊「オヽ、左樣か、其れでは左樣致さう、これ玉枝是から大德寺へ參らう」

『何處まで根のよい事か、玉枝を始め御附の者、お諫めしたが何聞かう、其儘向ふ紫野大德寺へとは參られるゝ。』

菊麻呂樣突然の御入に所化番僧はまご〳〵致すばかり、時に住職華叟禪師法衣の袖をかき合はせて御目通りを致す

尊「オヽ、其方か華叟と申すは、麿は冥途幽冥界と云ふ處へ赴き楠名和等に會ひたうて參つた、東福寺兆殿司の申すには其方ならば必らず案内致し呉れるとの事、頼むぞ」

『言ふのを聞いた華叟には、流石極める禪の奥、幼年ながら噂に聞く菊麻呂殿の御發明、何ぞや深き思召ありての事と察入り。』

華「仰せ委細承知致しました、御案内仕るでムりましよう、然しながら冥途へ參りまするには俗の御姿にては到底ならぬ事、されば出家を遊ばされ御修行をなされねば適はぬ事でムりまする、御案内は其上にて」

尊「オヽ、出家致せばよいか、早速に相成るであらう」

『天來出家をしたさの難題、菊麻呂殿は思ふ壺』

菊「コレ玉枝其方共は皆立歸れ、麿は今日より當寺に止まつて出家を致すのぢや」

『聞くに玉枝は打驚き。』

玉「えッ其れは容易ならぬ思召でムります、御出家の御修行など却々の事、御止め申すは恐入る事にムりますれど、萬一御修行の半途に御心戻る樣な事のありますれば却つて御身後世の爲にも相成ませぬ、殊には御出家遊ばすには此儀奏聞致ました上ならでは叶ひませぬ

菊「イヤ何と申しても麿は今日より佛道に入るのぢや、奏聞の事



宜しく取計らへ、早々に一同立歸れ、華叟出家の事頼むぞ」といつかな聞くべき樣子はムいません、此上は爲方がないから玉枝は禪師に對ひまして　玉「誠に御迷惑の事にムりませうが、彼樣仰せ出しに相成ましては容易に御歸館遊ばす事でムいませぬ故、後にて何分とも禪師の御諭しを願ひ御歸館に成りまする樣宜しく賴み上げまする

華「イヤ承知致した、確かに華叟御預り申上げたで、御心配なく御立歸りなさるが宜しい」開處で是非もなく乳母の玉枝始め一同は一旦大德寺を引取りましたが、其後幾度御迎へに參つても如何で御歸館の思召がありましよう

『幼なけれども天授の氣性、世を觀て悟り決心の思ひは堅く出家の覺悟。』

御傍にあつて其樣子を見る華叟禪師も感心致すばかり、實は其れ程の御決心でムいますに依つてモウ奈何爲樣もない、开處で菊麻呂樣お附きの方より致して此事、攝政へ奏聞を遂げ茲に愈々御勅許を得て大德寺華叟の御弟子と相成る。

『時に應永七年の末、華叟禪師が引導に髮剃落し袈裟法衣、法號茲に宗純と改められて、其日より、華叟々々と昨日迄呼びしを代へて師の坊と、身は大德寺の所化仲間。』



愈々是より致して奇々妙々頓智頓才、大德寺の小僧宗純が滑稽の百出に追々禪道の奥に入るといふ、天下無類の面白いお話は一寸一息して申上る。

## 三

扨て大德寺華叟禪師に於ては、古き御弟子の周海波凌鐵梅杢道等に申附けて宗純へ敎文を敎へさせる、元來敏い宗純繰返して聞く樣な事は決してない、一度敎へられゝば自から訓讀を致す位い、時に敎へる方が敎へられるといふ程でムいます、然れば禪師を始め弟子

一同舌を卷いて感心を致して居ります。

『唯其代りいたづら者、學びの暇には庭へ出て、木登り犬追ひ棒ちぎり、其腕白も凡ならぬ』

然れども師の前だから惡戲をしないの蔭だからするなどゝ言ふのではない、例へ什麼惡戲でも堂々と大威張でやるのでムいますから憎い處が決してありません、殊に尊き帝の胤ではあり、禪師も咎めるなどゝいふ事はない、或夜の事でムいます 華「宗純居るか 宗「はい 華「本堂へ參つて燈明を消して來なさい 宗「はい畏まりました」

『立つて行くのを其後より、何思ひけん師の坊は、密と忍びで尾い



で行く、來たる此方の本堂には、正面の方は夫金色の釋迦如來、左右の蓮華鐵燈籠。』

宗純は其處にある經机を踏臺にして、伸上つて御燈をフッフッと吹き消て居ります、此体を看た師の坊は其儘知れぬ樣に部屋へ歸つて待つて居ります處へ戻つた宗純 宗「殘らず消て參りました 華「オヽ左樣か何を以て消て參つたの 宗「へエー何でと申ますと 華「唯見て居つて消る物でない何を以て消たと聞くのぢや 宗「別に何も用ひませんフッフッと口で消ました 華「イヤ其れは怪からぬ事おやゝ口には諸々の不淨を喰らふ、汚れがある何故扇子を以て消さ

ぬのか　宗「あゝ然樣でムいますか口には諸々の不淨を喰らふ成程、口は汚れがある成程……以來氣を着けます」と其夜は其れで濟みましたが、

『明くる翌朝に相成れば、未明よりして師の坊は、本堂に出で讀經の續いて弟子達一同も後に居列び讀上げる、其聲々は物淸き朝の四邊に澄渡る。』

すると此中の宗純は、何時師の坊の傍にあるのを今朝に限てズッと後方へ離れて本堂の正面へ脊中を向け澄し込むで經を讀むで居ります、偶と其体を見た師の坊は聽て讀經を終つて後　宗「これ〳〵宗



純何んで其麼方を向いて居るのぢや　宗「お師匠樣御解りがありませぬか」

『夫口には諸々〳〵の不淨を喰らふ、汚れた口で讀經は、佛へ對して勿体ない』

宗「是から私は後向きでお勤めをする事に極めたのでムいます」とやつた、

『流石の禪師も一言ない、詰りながらに感じ入る。』

成程讀經も正面へ對つて大きな聲でやれば息のかゝる道理、然らば口の息で御燈火を消たと云つて答める事はない、其れを答めるな

ら讀經も正面からは出來ぬ筈と皮肉つたのでムいます、實に宗純は一が十斯樣な調子、時々華叟禪師の肺腑さへ刺すのでムいますからもう他の者などは絶へず何とかやられて居ります、

『時に年經ち宗純は茲に應永年の數取りて同じき八歳の春。』

一日大德寺の玄關へ町人体の男　男「御賴み申します　宗「ドーレはい何方から　△「えゝ手前は紅屋治兵衛でムいますがこの度亡父の年回に就きまして、來る十八日には何卒御參詣を頂き度うムいます、

宗「左樣でムいますか承知致しました今日は師の坊不在でありますに依つて御歸りに相成れば申述べまする　△「宜しふ何卒……此品



は甚だ御粗末ではムいますが御本堂へ御供へを　宗「はい其れは御叮嚀な事で……」　△「然て紅屋治兵衛が立歸つた後で見ますと其れは鏡餅でムります、洗石に發明でも未だ八才、宗純此れを見ると喰べたくなつたと見へて鏡餅を横噛りに噛り始めた、處へ　○「お歸りイ」といふ聲、

『立戻られた師の御坊、玄關口より廊下の此方、御出になるを宗純は心着きしに思はずもグット詰つた鏡餅、眼を白黑と大騒ぎ、やつとの事に飲み下し。』

宗「オツオツお歸り遊ばせ」師の坊は此体を見てお可笑さに叱る事

も出來ない、笑ひながらに 『のウ宗純、十五夜の月は滿圓なものを……』とさそくの言葉。

『聞いた宗純平氣な顏、己れが腹をば指さして。』

宗『雲隱れしてこゝに在す』と例の頓智、禪師は猶も莞爾々々と、

『宗純誰れぞ見へたのか 宗『はい紅屋治兵衛さんが參りました、

え、來る十八日に年回の佛があるさうで、御參詣を願ひたいと申されし、其れから粗末ながらと其置いて參りました』

『其れ滿圓な十五夜の月、雲隱れして此始末α』

宗『實は少々お毒味を致しました 『ウムよい〳〵、隱れ餘つた月



は皆にも眺めさせてやれ』と仰有つて師の坊は御機嫌よく其儘奥へお入りになる、

『後見送つた宗純は、餘つた餅を皆に分け。』

宗『さア〳〵遠慮なく喰べなさい』

## 四

其内年回の當日が參りましたので紅屋の主人治兵衛は大德寺へやつて參りまして 治『お頼み申ます 宗『ドーレ』と出て來たのは例の宗純、と見ると治兵衛が革羽織を着て居りますので 宗『オヽ先日御

出になつた紅屋の御主人だな、今日は私も師の坊の御供をして參るつもりでムるが、御迎ひに御出なされたか、然し御主人當山へ御出なさるに革羽織を被て來られたは如何な事でムる、殊には年回の當日革羽織など不淨な物を被られるとは何事」

『元來宗純遠慮は無い、鳥渡一本參らせたが、治兵衛も却々去る者ぢや。』

治「こりや、如何な事、當御寺の太鼓は何で張てムいますな」

『皮肉に出たが何のその。』

宗「太鼓は何處でも革で張る」



『と答へて平氣なもの』

治「では伺ひますが其革で張つた太鼓を御本堂へ備へてお置になつて、何故革を被た者が入つて惡ふムいますか」

『治兵衛が得意の其言葉終るが早いか突然に羽織の肩を打叩き』

宗「然れば本堂の太鼓は朝晝晩と日に三度づゝ此樣にバチを當る、」

治「ムッ」

『見事やられて大回み、顏を染たる紅屋の主人、こりや敵はぬと立歸る。』

後を見送つた宗純は手を打つて面白がつて居ります、處へ出て參

られた華叟禪師　華「これ〳〵宗純何を喧いで居る　宗「はい只今紅屋の主人が迎へに見へましたので　華「其れならば何故直ぐと告げぬのぢや　宗「實は其の……革羽織を被て參りました故咎めましたら本堂の太鼓は何で張ると問答を仕掛けます、そこで太鼓は革で張つてあるに依つて日に三度ヅ、バチを當ると申して打叩いてやりましたら驚いて立歸りました　華「アハ、左樣か」と禪師は笑つて咎め樣とも爲ない、其即座の妙を心密かに感服して居ります　華「何は兎もあれ宗純モウ紅屋方へ參らねばならん支度をしなさい」と軈て共に支度を致し供の爲藏といふのを伴れまして大德寺を御立出に相成る、



「華叟禪師は鼠の法衣、木藍染の袈裟掛けて、亦宗純は墨染の同じ色なる袈裟法衣僕の爲藏は紺看板、紫野をば堀川の岸へと出て來られる。」

中立賣の橋を東へ渡つて向ふが紅屋の住居でムいます、其れ禪師の御出と彼方より見て紅屋の主人を始め二三人橋の此方迄御出迎ひに參り　迚「これは〳〵禪師樣恐入りまする、御招ぎ申上げまして碌々の用意とてもムりませぬ、これは又宗純樣」

「とは言つたが何となく、先刻の負腹口惜い。」

宗「イヤ御主人先刻は失禮を致しましたハ、アお羽織を變へました

な」と宗純に厭に笑はれて彌々治兵衛は口惜くてならない、よし今に何か一本負かしてやらうといふ考へ、兎もあれ案内を致して、聽て橋を越へ供の爲藏は庭口へ、禪師と宗純は奥座敷へ通される、

『聽て佛前の讀經も濟み、華叟禪師を正席に續いて宗禪座に着けば法會の客の親族緣者順を正しく居流れる、其内運ぶ本膳も流石大家の馳走振。』

時に、主人治兵衛は禪師の前へ參りまして　治「誠に今日は有難い事に存じます禪師樣の御越佛も如何に喜ぶ事でムいませうか、甚だ粗飯ではムりますが何卒御箸を御取遊ばして……」と挨拶をして這



度は宗純に對ひ　治「宗純樣にも誠に克くこその御出御苦勞樣に存じます……承まはりますれば貴僧樣は大層な御發明にあらせられるとの事、就きましては此膳部の汁椀の蓋を其儘取らずに召上つて下さいます樣」と

『是には困ろと仕たり顔、一向宗純驚かず。』

宗「今日は結構な御法事お心届いた此御膳部有難く頂戴を致します蓋を其儘にお汁を頂く事、私大好きでムいます」と何處まで人を呑むで居るか解らない、

『却々宗純箸取らず、床の軸やら額の文字庭の景色と目を遣つて、

何の彼のと褒立てる。』

何處までも落着いた小僧だと治兵衛は焦れたくつてなりません、

治「種々と御目に止まりまして恐入ます、夫は兎に角宗純様、お汁が冷ますでムいますから」宗「あゝ左様々々種々拜見を致して居る内に、折角の御汁がさめたでムりませうな、誠に相濟みませぬが一寸盛替へて頂き度うムいます」治「はい承知致しました」宗「あゝモシ〳〵御主人盛替へて下さるなら蓋を取らずに盛替へて下さる様」

治「はッ」とばかり

『又も見事に返り討、四十の男が八才の子に、コロリ〳〵と投げら



れる。』

此体を見て頻笑まれた華叟禪師「イヤ治兵衛殿又やられたな

治「イヤモウ宗純様には到底敵ひませぬ」

『面目無しと恐縮の、席に居列ぶ一同も顔見合はせる斗りなり。』

其内馳走も濟むで、禪師宗純は御歸りに相成つたが、後に紅屋治兵衛熟々宗純の頓智に感服はするが然し一方には未だ口惜くてならない、元來惡い意味ではないが何か一度負かし度くてなりません。

五

『何うぞ致して宗純に、一泡吹かしてやりたいもの、巧い難題無いものかと紅屋治兵衛は腕組の、道が禪宗の一檀家、洒落た問答に憂身をやつす、折柄法會の明る朝、やつて來たツた一人の老婆。』

『オヽお豊ではないか』と見れば何か涙汲むで居ります、此老婆は紅屋に雇て長く奉公をして居つた下女の母で、昨日の法事にも手傳ひに參つて居りましたのでムいます　『甚麼したお豊大層元氣がないな』『ハイ昨日は何うも種々と御馳走になりまして　『イヤ何うして俺の方こそ何だ彼だと世話を燒かせて濟まなかつた、』『何のとんでも無い御言葉で痛み入ります』と云つたが何かほろ



り〳〵と涙を溢して居ります　『甚麼したのだお豊何を泣いて居るのだ』

『間はれゝば猶胸迫る涙拭ふた婆樣は。』

『實に旦那樣昨夜御法事の跡片附を濟ませまして宅へ戻つて見ますると』

『如何した事か情けなや、私が大切の四十雀コロリと死むで居りまする、娘は嫁に遣りまして一人暮らしの朝夕に、餌を與へれば辭儀をする、馴染めば我子も同じこと、樂しむで居た四十雀。』

『鳥叡が死むで了つたのでムいますの』と涙片手に物語ます、此

れも情でムりませう、

聞いて治兵衛は婆が氣を察しながらにてりや妙ちや、至極妙ちやと好む案じ、此れで宗純參らさう。』

治「やれ〳〵其れは氣の毒な、彼れ程可愛がつて居た四十雀、さぞ力が落た事だらう、然しなお豊、人間だつて生れて直ぐ死ぬ者さへある、亦死むで了つたものが泣ひたつて生て戻る筈もない、此上は懇ろに供養してやるが可い、其れには四十雀の死骸を大徳寺様へ持つて行つて引導を渡して頂いて厚く葬むるがよい、で其引導は昨日法事に見へた彼の宗純さんといふ御小僧に頼みなさい」



『言ふた治兵衛の心には、如何に宗純發明でも鳥の引導にや困らうぞ、苦るしむ事に違ひはない。これで何うやら氣が濟むと。』

治「それ御布施は俺が出して上げる」と治兵衛が何千か呉れましたのを貰つたお豊さん豊「ハイ〳〵種々と御親切に有難う存じます、其れでは是れから四十雀を持つて大徳寺様へ參りまして昨日の小坊様に御頼み申しませう 治「あゝ然様した方が宜しいといふのでお豊婆さん一旦立歸つて四十雀の籠を持ち大徳寺へと參ります 豊「御頼申します 宗「ドーレ」と出て來たのは宗純 豊「オ、貴方は昨日紅屋の法事へ見へられた小坊様でムいますな、それは誠に恰度宜い、私

は紅屋へ出入を致して居ります者でムいますが、私が飼鳥の四十雀が昨日死去ましたのでムいます、就ては貴方樣に引導を渡して頂き度う存じまして御願ひに出たのでムいます」

『言ひつゝ差出す鳥籠に、可憫や死むだ四十雀。』

鳥の引導は何程頓智の宗純でも詰るだらうと紅屋は寄越たのだが例に依つて平氣なもの 宗「ハイ〳〵宜しい早速引導渡して上げるがお布施を幾干か持つて來たかい 豐「ハイ二百文持つて參りました 宗「左樣か其れでは先へ二百文を御出し 豐「へエ先きへお布施を出しますか 宗「あゝ左樣だよ引導は渡すもの、渡し錢は先きへ貰ふの



が當然だ 豐「成程」と婆さんが二百文出しますのを受取つた宗純

宗「少し待つて居なさい」

『と草履をはくとスタ〳〵〳〵、表の方へと駈出した。』

豐逆逃げ出した譯ではあるまいと待つて居りますと軈て餅菓子を買つて戻つて參りまして婆さんモウ少し待つてお呉れ」と云つて其處へ座はり込むだ宗純、

『其餅菓子をひろげましてムシヤリ〳〵と喰べ出した。』

呆きれたのは婆さんだ 豐「もし〳〵お菓子を召喰るなら後でゆつくりと喰つたら宜しいに 宗「イヤ〳〵然樣でない、腹が空いて居て

は眞正の引導は渡す事が出來ない、是も皆佛の爲め」と餅菓子をウンと喰べ終りまして 宗「さア御出で」

『と婆さん伴れて本堂の方へ、其鳥籠を正面に鐘を叩いて讀經の、聽て立上つて鳥籠の前。』

宗純は衣の袖を合はせまして、兩眼を閉じエヘンと一ツ咳拂ひ、如何に有難い引導かと婆さんは兩手を膝の上に乘せて愼むで耳を澄まして居る、

『宗純は聲も嚴かに。』

宗「夫、萬物の長たる人間さへも五十年、汝小鳥の身を以て、四十



雀とは生過ぎた、喝ッ」と言つて 宗「さア婆さん是で宜い」イヤ婆さん明いた口が塞がらない 宗「あの其れが眞正の引導で……二、二百文 宗「左樣だ、斯樣な有難い引導は師の坊だつて渡されない」

『二百文では安過ぎる、よし又高いとした處で、お布施は先きに腹の中』

婆さんは愚痴たら〳〵で紅屋方へ立戻て此趣きを主人に話すと、

『主人は又も負けながら、彌々頓智に感じ入り今は仕返す張もぬけ實に凡ならぬ人ぞかし、將來は必らず大智識、恐るべしとて舌を卷く。』

## 六

『行ふ處、言ふ處、是が八才の少年か、不思議といふもおろかなり自然に備はる禪の妙、夫其上を師の坊の華叟禪師が御諭し、月は一月日は一日、明けに覺へて夕べに悟る鍋の月代石の髭、實に面白の一生や』

宗純或夜の事寢に就いたが眠られません、便所へ行かうといふので廊下を參りますとプーンと香ふばしい樣な生臭い樣な匂ひが鼻へ入つた。



『ハテナと思ふた宗純が、鼻の穴をば四方へ向け見當着ければこりや妙ちや、怪しい匂ひは師匠の居間。』

宗「オヤツ」

『居間の方へと忍び歩、密と樣子を窺へばこは开も如何に師の坊は鮭の粕漬旨さうにお茶漬なんぞを召喰る。』

サラリと障子を排ぜて　宗「あの御呼びになりましたか」

『しらばッくれて内に入る、流石の師の坊驚いた、愴慌て隱す鮭の皿。』

華「な、何だ今時分、呼びは致さんが　宗「其れでも今私が便所へ參

らうと致しますと、

『旨い匂ひが鼻を呼ぶ、鮭でお茶漬惡くない、お隱なさつた机の下。』

宗『お師匠樣今晩の鮭はチト鹽が辛らうムいます』と例の皮肉、華叟禪師此位ひ困つた事はない。華『まア宜いから那方へ行つて寢なさい。宗『はい寢るのはモウ必らず寢ますが此鮭の片を附けて頂きませんければ幾日經つても寢る事ではムいません、一体御師匠樣鮭といふ物は木になる物でムいますか、何うも私は鮭は魚類の樣に思ひますが、で魚類で有つて見ますと腥さ物で、腥さ物で有つて見ますと



豫て喰べてはならんと仰せがムいました樣に存じますが、ハイ御師匠樣如何なものでムいませう、

『斯樣言ひ出したら聞くのぢやない、膝を正して眞面目顏、惡い處を嗅出され華叟禪師も大凹み。』

華『やれ〳〵大分切込むで來るな、イヤ尤もぢやがヘナ宗純や、年若い修行の身には魚類など喰べては宜しくないが、俺の樣に年老つた者は……そりや宜ひといふ譯はないが何分精は盡きるしな、經讀むに聲は枯れる息は切れる、誠に身躰が勞れるに依つて、養生をせにやならん、乃で此頃醫者からの薦めもあり、其れでやつて居る

のぢがや、若い者ではなし佛も許さうて　宗「へエー誠に年を老ると都合の宜いものでムいますな　華「厭に申すな其代りチャンと佛罰を受けぬ樣に引導を渡してから喰べるのぢや　宗「へエー引導を渡しますかな、然樣すれば差支がない成程、では一ッ私も後々の心得になる事でムいますから、どうか其引導を伺つて置きたいもので　華「諾し〳〵敎へて遣る、

『爲方がないから師の御坊、鮭の皿をば打叩き。』

華「汝來元枯木の如し、活さんとすれども再び水中に泳ぐ事能はず事ろ愚僧の腹を肥して佛果を得よ喝ッ、奈何だ解つたか　宗「なゝ成



程　華「妙な返言を致すな　宗「イヤ恐入りました未だ修行の足りませぬ事とて左樣いふ調法な引導は存じませんでした　華「何うも一々お前に對つては敵はん、然し差支の無い事とは言へ內々にして置いて呉れ　宗「へゝ〳〵話して惡い樣な事を決して言ふ氣遣ひはムいません、ヨア御ゆるりと御養生遊ばせ、然し私は宜しふムいますが成丈句はぬ樣にお燒にならぬと不可ません」と何處までも皮肉を云つて宗純は自分の部屋へ下がる、

『後に禪師はホッと息、さて〳〵油斷のならぬ奴、人にこそ寄れ宗純とは、とんだ事だと大弱り。』

然しながら何を言はふが爲樣が、一々に秀れた調子の宗純でムい、ますが、禪師は事のある度、あゝ豪ひ奴だ〳〵と思ふばかり、すると其翌日の事、朝の看經が濟むで暫く致しますと禪師の居間へお弟子の波凌杢通の兩人は容易ならぬ顏附で入つて參りまして　杢「お師匠樣〳〵　華「何ちやな愴慌しい　杢「どうも宗純が大變な事をやつて居りますので　波「何卒御叱りを願ひます　華「はて何を致して居るか知らぬが佛道に入つた身が大變などゝは矢鱈に申す言葉でない、殊に宗純の爲す事大方は心得のある事ぢや」

「禪師は昨夜の弱身もあり、元來最負の宗純なら、他の弟子達叱ら



うと、却々合點の樣子も無い。」

杢「でも御師匠樣只今宗純が何處からか大きな鮒を捕つて參りまして畫のお菜にするのだと云つて臺所で鱗を除つて居ります　波「他の事ならば兎に角あんまりでムいますから申上げます」と訴へたので

華「イヤ成程其れは宜しくない」

「とは言つたがさてこそは、早速昨夜の搖返し、是は叱言も云ひ憎い。」

華「よし〳〵行つて申聞けてやる」と爲方がないから波凌杢通の兩人に尾いて臺所へ出て參つた華叟禪師　華「これ〳〵宗純何を致して

居る怪からぬではないか　宗「是は飛んだ處を御覽に入れて恐入りますが、實は其私共年の幼ない者は腹に堪へがムいませんからチト肉食を致して腹力を強く致さぬと讀經にも差支ますでハイ、其代りチャシと引導を渡してから食します　華「ウーム、何んといふ引導ぢやな」

『餅の脊中を庖丁で叩き聲つくろッて宗純は。』

華「汝元來生木の如し、放つまじとすれど動もすれば水中に遁れんとす、濁れる池中に游ばんより寧ろ愚僧の腹に入いつて糞となれ喝ッ」

『聞いて御弟子は口アングリ、師の坊驚き奥に入る。』



## 七

宗純實際亂暴な事もやらかすが、總ての事凡でない、然れば叱らうとしても何時も刹那にギャフンとやられる始末、併し華叟禪師に於ては何處までも宗純に心を着けて試すに油斷は致しません、或時何か思案をされた禪師は　華「宗純や一寸來なさい　宗「はい何ぞ御用で　華「お前御苦勞ぢやが東福寺まで使ひに行つて貰ひたい　宗「畏まりました　華「此書面を持つて行つて直々に御返事を伺つて來るのぢ

や　宗「はい承知致しました」と書面を持つて紫野を立出で、

『伏見街道東福寺、通天橋をば右手に見て左りの方の玄關口。』

宗「お頼申す　取次「ドーレ何方から　宗「大德寺より參りました何卒此書面を大和尚へ御返事は手前伺つて參ります　取次「あゝ左樣か暫時お控へを……」と直ちに其書面を持つて取次の僧は住職兆殿司に渡します、打披いて御讀みになると、

前畧此書持參の者愚僧徒弟宗純、先年貴僧方より御案内ありし皇子菊麻呂君に御座候元來の才德凡ならず候て未だ入りて歳月淺く候得共早悟道得了致し同宿を驚かす事屢々御座候就て今日御許へ



差向け候間何卒此者の困り入る程の事仰せ聞けられ後々の御識め御授け下さらば有難き事に存じ候

「讀終つた殿司殿、打頷づかれて此れへと云ふ、言葉の下に入り來る鼠の法衣に丸グケの帶、あな賢けれ過る年當寺へ見へし其折は、數多の附添ひお乳の人、風も厭ひし菊麻呂君彼の時言ひし難題は、出家遁世の覺悟かな。』

兆殿司殿密かに感心をされたが、然し其れと柔しい顔は見せない

殿「宗純といふはお前か　宗「はい　殿「御苦勞であつた、立歸つて申さう、書面の趣き委細承知した何れ近き内に御目にかゝつて申上げ

ると、よいか　宗「はい畏まりましたお返事は其れだけで　殿「ウム……其れに是はお前に尋ねたいのぢやがお前の師匠華叟殿は嫁を貰つたと云ふが眞かな」

『意外な問ひだが驚かぬ、莞爾笑つて宗純は。』

宗「はい貰ひましてムいます　殿「して何時頃の事かの　宗「左樣子の刻でムいました　殿「何處から迎へた誰れの娘ぢや　殿「東福寺兆殿司樣の娘」

『遂に殿司も一言ない。』

殿「宜しい歸んなさい　宗「左樣なら」と其儘急いで立歸つて參つた



宗純　宗「只今歸りました　華「あゝ大きに御苦勞何と言はれた　宗「御書面の趣委細承知した何れ近き內に御目にかゝつて申上げるとの事でムいます　華「で他には別段御言葉は無かつたか　宗「えゝありました殿司樣の仰有いますには御前の師匠の華叟殿は嫁を貰つたといふが眞かとお尋ねでムいます　華「何だ嫁を貰つたと飛んでも無い言を云ふ、お前立派に言ひ開らかれたか　宗「はい立派に貰つたと申しました　華「莫迦な言を云はしやる　宗「然樣すると何時貰つたと仰有るから子の刻と答へました　華「ウム　宗「其れから何處から迎へたとの御問でムいますから東福寺兆殿司樣の娘と答へました」

『聞いて禪師は今更に感服するより他は無い、こりや自己とて殿司とて、京都の名山五ツの寺、何處の智識名僧でも却々及ぶ事ではない。』

實に物に動せず事に貧けず、其當意即妙は彌々出て驚くばかり、今は最早紫野大德寺の徒弟宗は幼年ながら古老も及ばぬ豪い者であると到る處の大評判。

『時に足利三代の將軍義滿公、宗純が事聞こし召され、都北山金閣寺其御住居へ出よとの御意大德寺華叟禪師へ御沙汰ある。』

大いに有難き事に心得御受申上げて華叟禪師は宗純を伴び、當田



已の上刻金閣寺へと罷り出る、

『暫く一間に待受たが、軈て御席定まりて此方へと云ふ案内に、廣間へこそは通さるゝ時に正面の御襖左右へさッと打排らけば、大相國鹿苑院殿、將軍源の義滿公欣然として御着座、側には肱掛御香爐左右に居列ぶ面々は是北朝の大々名、一色桃井千葉仁木山名石堂畠山、表袍大紋晴れやかに續いて、居流る其他の臣見渡す東西綺羅星と實に嚴かに見受けたり。』

時に義滿公禪師にお對ひ遊ばされて　義「オヽ華叟能ふ見へたの召伴れたか宗純とやら申すか　華「ハッ仰せに從ひ宗純召伴れまして

ります　義「許す近ふ　畢「ハッ」と御言葉の下に兩人座を進みます る、

『御側に居列ぶ一同は、名君如何なる問あるか、奇童は如何に答ふるかと、片唾を呑むで扣へ居る。』

茲に宗純が時の將軍を呆ッと驚かせるといふ、一休禪師生立の内の大眼目は回を代へて申上げます。

## 八

義滿公は頻笑まれて　義「宗純其方は才智秀れし者と聞き及ぶが左



樣か　宗「恐入りまする別に智惠とてはムりませぬが、畢竟世の中に愚が多いので目に立つ事かと存じます」と憶面も無くズバ〳〵と申上げる、

『列ぶ諸侯はひた呆され。』

イヤ大變な小僧だと何れも驚いて居る、義滿公は御膝を進めて

義「宗純彼方の衝立に虎が描いてあるであらう　宗「ハッ」と云つて振向いて見ますと誰れの筆でムいますか立派なる衝立の圖面、

『兩眼睜さ牙を嚙み、月に嘯き猛る虎。』

義「其方彼の虎を縛つて見よ」と仰有つて何と答へるかと其樣子を

熟つと御覽になる、

『宗純何の考へもせぬ、畏まつて候と法衣の裾を端折上げ。』

宗「恐入りましたが何ぞ御縄を拜借致したい　義「オ、誰ぞ縄を宗純に遣はせ　近習「ハッ」と御近習は君公も君公なら小僧も小僧だと呆きれながらも軈て羽二重縄を持つて參ります、其れを受取つて宗純其衝立の側へ來たりまして、鳥渡見構へを致しましたが、

『列ぶ諸侯を小手招ぎ。』

宗「あの其處に居る茶色の伯父さん」

『御遠慮無しに呼ばれたのは、是ぞ將軍のおばえ芽出度き一色式部



當時頂く二萬貫、風折烏帽子茶色の素袍。』

成程名が解らないから茶色の伯父さんといふのも無理もない

宗「一寸茶色の伯父さん御衝立の向ふへ廻つて此虎を追出して下さい」

『一色殿は面喰らふ、起き上れず斷はれもせず、君公の御顏と宗純を唯見くらべて居るばかり。』

是を御覽になつた義滿公　義「ア、最う好いぞ縛るには及ばぬ

宗「左樣で厶りまするか折角支度を致しまして殘念に存じます」此位ひ人を喰つた小僧はない、是より致して將軍家より御相伴を申付

られ程なく膳部が運ばれます、と見ますと何れも膳部は魚の御料理でムいますから華叟禪師に於ては慎むで箸を取ません、が、

『宗純さらに遠慮は無い、早速箸をば取上げる、道がに見兼た師の坊が袖を引くのも知ん顔。』

其体を見た義滿公　義「コレ〳〵宗純其方は魚肉を喰べるのか

宗「イエ喰べは致しません　義「喰べぬものが何故箸を取る　宗「喰べは致しませんが唯咽喉を通しますので、つまり咽喉は鎌倉街道の樣なものでムいます　義「何で鎌倉街道ぢや　宗「恐ながら申上げます、

『鎌倉街道に違ひはない通るだけなら通ります、八百屋魚屋云ふも



さら牛でも馬でも隔てはない。』

義「然らば武士も通るであらうな　宗「ハイ通ります　義「ウム」

『言ふが早いか義滿公、スラリと抜いた御佩刀。』

一刀宗純の前へ突つけました。

『此れを眺むる諸大名、華叟禪師もスヤ大事と皆手に汗を握り居る

然れども宗純ビクともせぬ、猶も膝をば乗出し、聲張上げて申す樣

武士は通れど此時節、南朝の臣世にありて事起さんも謀られず、此

處に關をば設けたり。』

宗「抜刀の武士は通しませぬ」

『美事の答へに義滿公、ハタと御膝打給ひ其儘太刀は元の鞘。』

義「オヽ天晴れな奴、それ此一刀遣はすぞ、僧侶に用なき物なれ、今日の紀念ぢや　宗「ハッ　義「アヽ華叟其方は良き弟子を持つたな

宗「恐れ入りまする」　茲に師弟共に此上無き面目を施し、義滿公は彌々御機嫌麗はしく、華叟禪師へ對しては御秘藏の珍器の内より結構なる茶碗をお取出しになり　義「是は唐土より傳來の蛇杢の茶碗といふて予が自慢の物ぢやが其方へ遣はし置く近き内に大德寺へ參るに依つて其時には此茶碗で一服所望致すぞ」と仰有つて茲に下し置かれました、



『猶終日の御物語、やがて夜に入り御暇、高貴の茶碗御刀、是ぞ當寺の寶ぞと打喜こびて戻られる。』

扨て立歸りまして其茶碗御刀共に大切に納めて置きましたが、夫より五六日過ぎましての事華叟禪師が何處へか御出掛になつた不在の事でムいます、波凌杢通周庵鐵梅などの弟子連中　杢「なアこれ此間お師匠樣が公方樣から貰てムつた蛇杢の茶碗といふのは什麼物か一遍見たいな　波「俺も左樣思ふて居るのだが　周「僥倖今日は御師匠樣が不在だから一ッ持つて來て見樣ぢやないか　杢「其れが宜い〳〵

周「だが宗純に見られると又むづかしい理屈を言はれやせんか

逆「何も鳥渡拜見するのに差支はあるまい　李「何しろ今宗純は本堂の方に行つて居る樣だから早く〳〵」と其處で密と彼の蛇李の茶碗を持つて參りまして　逆「へエー此れが其麼に大層な品かね　逆「何だ詰らない樂燒ぢやアないか　李「お見せ〳〵　逆「まアお待よ私が見て居るのだから　李「そんなに何時まで見てないでも宜いぢやアないか」と言ひながら李通が無理に取らうとする途端、

『其手がすべつて取落す、茶碗はポンと眞二ツ。』

一同「あッ」

『とばかりに一同は、忽ち變る顏の色、暫しは何と言葉も出ぬ處へ、



本堂の方よりして此場へ來たる宗純は、此体を見て眼を圓く。』

宗「ヤアー大切の茶碗を持出して割つたな、イヤ却々威勢が可いね」

『氣樂な言を云つて居る、何にが威勢が可いものか、皆は太息泣き ツ顏。』

## 九

『例へ過失出來さうとて、品にこそ寄れ普通ならぬ將軍家より拜領の、唐土傳來蛇李の茶碗、又と世に無い此品を毀して言譯奈何あら

う若し武士ならば切腹ぢや佛道にある身なりとも御許しあらう筈が無い、杢通周庵什麽しやう、波凌鐵梅如何せん見合す顔は涙なり。』

皆が弱り返つて居るのを見て居た宗純　宗「オイ〳〵許しも受けない物を持出して見る程で隨分意氣地がないナ　杢「だつて這麽豪い粗忽をして了つては途方に暮る　宗「其麽に困つて居るなら乃公が引受てやらうか　一同「えッ引受て呉れる」

『一同思はず顔上げて、地獄で佛ぢや御開山、日頃賢い宗純殿、御師匠樣の御氣に入り何とか巧く御詫の爲樣、出來るものなら賴むぞや。』



と一同はモウ手を合はさないばかりでムいます乃で宗純は　宗「諾し〳〵承知した皆心配おしでない」と何でもなく引受て了ふ、あんまり安請合だから、杢「宗純さん確かに宜いかい　波「引受て呉れるのは實に有難いが後で將軍樣からお咎でもある樣なら今の内から諦めて了ふが　宗「何だいお前等は人に泣ッ面をして賴むで置きながら引受てやれば其麽言を云ふ、大丈夫だよ安心をして御在よ」と言つて居る處へ　△「お歸りイ」といふ玄關の聲、

『今さら何れもヒヤリとする、一向平氣な宗純は。』

宗「宜いからお前等は知らん顔をしてお在」

『言ふかと思ふと茶碗の毀れ、袂へ入れるや玄關の方、スタ〳〵と駈出して、今御昇りになる禪師の前立塞がつて聲高く。』

宗「作麼生」と突然問答を仕懸ける禪師も立つた儘、華「說破」宗「生ある物は」華「必ら ず死す」宗「形ある物は」華「必ら ず碎く」

『時に取出す茶碗の毀れ。』

宗「然り斯の通り、あゝ師の坊の御答へ恐れ入る」華「えッ」と流石の華叟禪師も思はず叫んだ、

『宗純何處まで澄したもの、生ある物は必ら ず死し、形ある物必ら ず碎く、土で埋たる此茶碗、斯樣なり果るが世の眞。』



禪師呆きれて又叱言も出ません、イヤ叱言處ではない將軍家へ對して如何申譯を致したものかと思案に暮つて、流石に今日は禪師叱言は云ひませんが御機嫌惡く奥へ其儘入らうとするのを 宗「師の坊と呼び止めて 宗「一首詠じます」

高砂の尾上の松も枯るゝなり
土でつくねた茶碗大事か

此歌を聞くと 華「ウム可し〳〵、思案するは俺が負ちや」と早速に御機嫌が直り 華「其歌を添へて將軍家へ御詫に出る、明日同道致せ 宗「あゝお解りになつたか流石は師の坊」豈夫左樣も言ひますま

いが、何しても此師にして此お弟子實に大したものでムいます、乃で翌日に相成ますと禪師は宗純を伴れて、北山金閣寺なる將軍家御館へと罷り出まする、直樣お目通りを許されましたに依り謹むで恭悅を申上げ扨て茶碗を其儘差出し「宗純の過失に斯の如く打碎きました、君公御噴りの程覺悟致し居ります、弟子の過失は師の過失共に御處分を頂きまする、時に宗純奴此れに就きまして一首詠じました、其れ宗純恐れながら申上げろ」「はい、其節生ある物はと師に問へば必らず死すとの答へ、形ある物はと問へば必らす碎くの答へ開處で一首申しまして厶ります、



高砂の尾上の松も枯るゝなり
土でつくねた茶碗大事か

宜しく御處分を願ひます、

『是れぢや怒らう隙もない、元來名君義滿公お笑ひなされて能く破つた。』

豈夫能く破つたとも言ひますまいが、

『其れに附けての悟りの歌、又も感心遊ばされ、ことの外なる御嫌機』

義「元來遣はした物なり茶碗などは如何でも宜い、今日も寛りと致

せ、宗純其歌の松で心着いたが、彼の庭の向ふに見へる松は其方には何と見へるな、曲つて居るか眞ッ直であるか如何ぢや　宗「左樣にムりますありや眞ッ直な松でムります　義「フーム妙な言を申すのあれは捻れ松とさへ申す程ぢやが如何致して眞ッ直ぢやナ　宗「恐れながら彼れが君公には眞ッ直と見へますか」

「ハテサテ其れは困つたもの、松程直な物はない、夫彼の如く誰が目にも、曲つたものは曲つたと其儘造らず見せて居る、僞のない彼の姿實に眞ッ直ではムらぬか、よしや素袍大紋に嚴格らしく見せうとて內には曲つた武士もある、人にも欲しい彼の心、さて〳〵松は



正直ぢや。」

宗「其れでも曲つて居ると仰せでムりますか　義「ウム天晴れな答へぢや」

「お詫に出た咎めは無く今日も數々御褒の言葉」

茲に此日も又御相伴に預つて、終日お對手を申上げやがて大德寺へ立歸られる、後に此趣きを宗純より聞いた他の弟子一同の安心、

「彌々是より宗純には、出て重ねる勉强修業、今日と過ぎ明日と暮らす間に、春秋繰て數へ年十三才とは成られたり。」

是より宗純一休と改名の件に相成まする。

# 十

『其年彌生月中旬、これは〳〵とばかり花の吉野美くし、亦嵐山は一層に裾を流るゝ大堰川、花の吹雪の下を行く、小船の酒や、筏乘。』

實に言はれぬ景色、今が花の眞ッ盛りでムいます時に大德寺新樹庵の僧正華叟禪師は弟子一同を呼むで 曰「さア〳〵皆よ今日は一日暇を取らするに依つて打揃ふて嵐山へ出掛け花見をして參れ」との御許一同は大喜び各自握飯を拵へるやら煮染を調へるやら夫々支度



を致しまして軈て宗純共々嵐山として參りまする、

『やつて來たッた大堰川、花に映じて紅さす、此處は名所櫻の渡。』

當今は渡月橋と云ふ橋が架つてムいますが未だ其時代は渡船場でムいました、其渡船場まで參りました時に宗純「ねえ皆な少し待たないか、向ふへ渡るより此方川岸で花を眺めた方が風情があるではないか、

『花を見るなら外が可い、中に入つては花に醉ふ、醉ふちやわからぬ花の味、こゝらで見るが一番ぢや、色も美し香も匂ふ。』

宗「什麼だい然樣しないか」と言ふので年齡は中で一番下だがもう

皆恐れ入つて居る處の宗純の事でムいますから、其れでは然樣爲樣と傍らの茶店より莚を借て參りまして、此方の川岸の眺めの佳い處へ陣を取り持參の喰物などをひろげて打興じて居りますると向ふの方より今渡しを揚つて此方へと來る一人の翁、

『見れば品可き撫髮に、いと風流な被布出立、杖に結むだ瓢酒、チビリ〳〵と飲みながら片手に下げし提藍は花見肴と知られたり。』

翁「イヨー此れは坊樣達向ふ川岸から花の眺め却々〳〵風流を極られるな何うぢや酒を參らせ樣か」と云はれたので周道といふのが 周「董酒山門に入るを許さずとムる、酒は飲まれません 翁「はゝア禪家と



見へるな、然し山門に入るを許すまいが此處は外なり花の莚ぢや少しは可からうア、ゝゝ何うぢや〳〵 周「いゑ〳〵他の物なら兎に角酒は御斷り致します 翁「では肴を進せ樣 周「何う致して圓頂黑衣の身で魚肉などゝつさうもない、御斷り致します 翁「ヤン〳〵其れは不自由千萬、酒は天の美祿とも申す亦此旨い肴が喰べられぬとは情けない、お前さん方何の因果で出家などになられた」此時李通が其れへ出て 李「イヤ御言葉であるが一人出家すれば九族天に生ずと申します 翁「アハゝ、其れは俗人を惑はすまでの言ぢや、其慶言を高慢氣に言ふて酒も飲まず腥さも喰べずに居樣と心に眞の悟

りがなければ何にもならん」

『夫釋尊の高弟たる目蓮が母は、地獄に落て憂目を見た、一人出家して九族天に生ずるなら、左樣な事もあるまいに。』

翁「其返答は何うぢやな」

『言はれた時に一同は、何と答へも出ぬ樣子。』

此時に少し一同に離れて花を眺ながらムシャリ〳〵と何か喰べて居た宗純ッカ〳〵と其翁の前へ來まして　宗「砂中に玉あり他の禁戒老釋迦に任す焉」と言ふや其盃を借り　宗「酒も頂戴お肴も結構」

『御馳走樣ぢやと遠慮無し、肴は殘ず瓢は空、道がの翁もオヤ〳〵



〳〵。』

翁「ウーム」と暫く其顏を見て呆されて居たが軈て　宗「あゝ豪ひかな生如來、有難し〳〵」と言捨て翁は其儘行き過ぎて了ひました、後に一同は宗純の振舞にも驚いたが變つた翁にも驚いて居ります、

宗純は　宗「アハヽヽヽヽ」と面白相に笑つて居る、

『折柄春の花曇り雲重なりし雨催ひ、坊主天窓へポツリと、降出したる花の雨。』

降つて來ては爲樣がない引上げ樣と皆愴惶て騷ぎ出す、他の花見の客も三々五々何れも晴の小袖を厭ふて駈出すから櫻の渡しも急に

込合ふ始末宗純は人々の騒ぐのを面白さうに眺めて己れの濡る事などはさらに介意はない　一同「さア宗純さん歸らう〳〵斯樣降つて來たのに落着いては居られない　宗「アヽ歸らうだがマア御覽彼の女の人は帶が濡るといふので泣き顏をして居る　宗「えヽ宗純さん人事では無い此方も濡るぢやアないか　宗「やれ〳〵お前等も泣き面をする仲間か、だから先刻の樣な爺さんに油を取られるんだ、雨が降れば濡るが當然風が吹けば埃りが立つ、何も喧ぐ事はない、皆濡れるを厭ふならさつさと先へ歸んなさい、俺はお師匠樣へ一ッ歌を詠じて土產に持つて後から緩々歸る」とイヤモウ落着き拂つたもの、其內



雨は彌々烈しく降つて參りますので、到底つき合切れないと見へて一同は急いで先へ立歸ります、

『後に宗純悠然と、首をひねつて歌一首、

有漏路より無漏路へ歸る一休み
雨降らば降れ風吹かば吹け

出來た〳〵と獨り笑み、法衣の雫厭ひもなく、雨の中をば戻り來る』

華叟禪師に於ては先に戻つた弟子達より其日の花見の模樣を聞き彼の翁の事宗純の振舞一々面白く頷かれ、待つ間程なく立歸つた宗

純が雨に得た悟りの歌を聞かれた時は、思はず膝を打たれての御感服、『能くも詠むだの、有漏路より無漏路へ歸る一休み……ウム宗純今日からお前は一休と號をつけよ』と茲に始めて一休と相成ます。

## 十一

『時に應永十五年、茲に一休十五才、頃しも春の末つ方、華叟禪師の御病氣あらゆる醫藥介抱も効なく募る病勢の、昨日は今日と重りゆく然れど禪師は大悟の身、世に何想ふ事も無し。』



唯暉々として眠むり別に苦るしみとてはムいませんが、日に増し頬は落眼は窪み、看護を致す者も、まア昨日は事無く過ぎたが今日の引汐時には如何あらうかと氣遣ふて居りまする、

『折柄五月朔日の事、何想はれしか禪師には其重き身を朝未明、疾く起出て弟子を招び、水を汲ませて自からに身をば清めて新らしき白無垢纏ひ木藍の法衣正しく袈裟を掛け、水晶の念球爪繰つ。』

『今日は俺の臨終ぢや、本堂へ參るに依つて誰れぞ肩を貸せ、亦一同漏れなく本堂へ集まる樣』と禪師程の人と相成ますると其逝く時が知れるものだと見へます、

『是を聞きたる一同の者、さては今日こそ御入寂さるにても大いなる智識かな、其日を斯くと知り給ふ。』

皆今更に恐れ入つて居ります、克く俗の身では俺はモウ到底も助からないから後々の事を頼むよなどゝいふと側に居る者が何を言ふんだいそんな氣の弱い言をいふやつがあるものか早く癒つて鰻丼の二ツも平げる樣にならなくつて何うするなどゝ景氣を附けます、すると病人の方でも水を呑むにさへ管でやつて居りながらウームンモウ一度竹葉のあらい處が喰べたいてな熱を吹くイヤ俗の世の情は其れで保つので厶いませうが、華叟禪師などが斯樣言ひ出したに對し



ては誰れとて無益な慰めなどは爲ない、直ちに御言葉の弟子達は其手を肩に禪師を痛はりつゝ本堂へ參りまする、

『正面の椅子に身を持たせ、兩眼閉じた禪師には其儘暫し默されしが紙て靜に言はるゝ樣。』

華「一同集つてあるか……一休は居るか」「はい此處に居ります

る」華「オゝ左樣か、前に座せ」「はッ」華「御本尊の前、今逝く際、堅く頼むぞ一休傳道の事」「はッ承知仕りました、

『傳道せよの一言は、當寺後住たれとの意、並居る者はさもこそと、年齢こそゆかれ一休が日頃秀れし道德堅固、誰れに不滿のある

べきぞ、良き後住を得たりとて、皆欣びて居りまする。』

聽て其言葉終つて禪師は再び眼を閉じ默しましたが

『ハヤ其儘に逝かるゝか、燭の輝き幽妙に、金色ゆらぐ佛の座、今入寂と見ゆる時、並居る弟子は一齊に經文讀誦せんとする。』

此時に華叟禪師は其れを止めて 『イヤ經文など唱ふるに及ばぬ常に經文は腹にあるが……」と言はれた、是は然樣でムいませうが世に汚れた俗の人にこそ往生を清くする經文が必要でムいませうが生涯持き斯の如き名僧に何經文が要ませう、時に禪師には「今より參るぞ」と一言



『其耳元へ口寄せて。』

二「何處へ」

『と問ふ一休の其顏をハヤ見へぬ眼に打眺め。』

華「されば極樂へ」との答へ、又問返して一休　二「何しに御出遊ばす」とやつた流石の禪師も此れには「ウム」とばかりに詰りました

二「御答へのないは師は悟道に狂ひが出ましたか」

『言はれた時に禪師には、今絕なんとする聲揚げて、極樂に左のみ用事はなけれども彌陀を助けに行かにやなるまい。』

二「善哉々々」と一休は手を打たれた、莞爾と笑まれた華叟禪師は

眠むるが如く大往生を遂げられる、時に御年齢七十七才でございます、

『逝く者も亦送る身も、共々大悟徹底の清き笑ひの臨終は、實に禪道の極ぞかし。』

乃で其翌日弟子等は元來都各寺の住職壇家の者打集り夫れ〳〵協議致しまして茲に葬禮も滯りなく相濟みますると此葬禮が濟むで六日ばかり過ぎての後、北山金閣寺より亦將軍家重き御病氣とあり、只今大事の場合とのことにて一休へ急々の御召、早速に罷り出まする。



## 十二

『都北山室町御所、時の將軍義滿公が御寢殿今御落命の時迫り、集まる洛中洛外の名僧、ハヤ御覺悟の將軍が、御側近く進まれて唱ふる經は幾百卷』

何がさて當時天下の御一人でムいます、實に容易ならぬ事、御側に扣へた石堂千葉一色其他の面々何れも君公の御樣子を窺ふて心痛限りムいません、處へ罷り出た一休將軍は重き御枕を上げられて御欣び遊ばされ　義「オヽ一休見へたか、近う寄れ、　一「はッ　義「聞く

華叟には予に先立ちて去つたとの事、予も今は時が參つた、其方が引導を賴むぞ　「恐れながら申上げます、愚僧引導を致す事身に餘り譽れにはムりまするが、佛家の法式は樣々、君公御他界の際は、相國寺長老が引導仕るべきでムります

『申上げれば義滿公、痛く御力落されて世に類ひなき一休が引導望み居つたるに、其れならぬとは我は亦罪障深き者ぞかし、噫是非無しと御目を閉じ本意無き体に一休は御側へ進み耳に口、後生をば願ひ過ぎるは要らぬ事、もし極樂を通り過ぎなば。』

と一首申上げますと、御目を開かれた義滿公は思はず　「オヽッ



と仰有つて、

『いと嬉し氣に顏を見詰給ふた此時に、一休聲の張强く』

「喝ッ」と一言、

『茲に足利三代の將軍御他界、御年齡時に五十一。』

實に一休が一首の口吟みに滿足を遊ばされて大往生を御遂げに相成りました、何はさて當時太政大臣從一位准三宮まで昇進せられた御方の御逝去でムいますから、都の騷ぎは却々一通りでムいません扱て其葬送もやがて相濟みまして其後一休に於ては師の坊の御遺言に基き一山の僧より致して公儀へ御屆けをなし、愈々御許しを受け

て紫野大德寺新樹庵の大和尚と相成ました、大和尚其年齢十五才と
は實に非凡な事でムいます、
『其内時經ち日は過ぎて、やがて師匠の三七日、されど一休新住は
法會營む氣色もない、初七日其儘二七日亦其儘に濟まされて此三七
日を亦しても其儘にする御處存か、御發明でも未だ若い、如何なさ
ると檀家の衆、一休和尚へ御面會。』
檀家の紅屋治兵衛錢屋久兵衛其他重立ました連中が大德寺へ參り
まして、他ならぬ先住の御法會なさらなければ相成ますまいといふ
のを聞いて 二「イヤ御一同御心配で恐入る、決して捨て置く譯では



ありませんが、將軍家の御他界や何や彼やで其儘に過ぎましたが成
程もう三七日、一ッ盛んな法會を致しませう 紅「是非左樣遊ばすが
宜しふムいます 鱒「それでは檀家中へは私共からそれ〳〵知らせる
樣に致しませう 二「イヤ檀家ばかりでなくとても盛んに營むなら他
宗の者も參詣に來て貰ふ樣にしたい 紅「それは可い思召でムいます
二「就ては甚だ御氣の毒であるが、お前さん方の家の若い衆でも丁
稚さんでも手の空いて居る人は殘らず貸て下さらんか 紅「そりやも
うお易い事で何しろ他宗を呼ぶとなつては却々回章などで知らせる
譯にゆくまいから、撒紙を四方へ配る事にしよう 鱒「然し和尚樣他

宗と云つては却々大層な人數でムいませう、その撒しを書くのからがゐらい事ではありませぬか　二「イヤそれは到底書いてなどは居られないから版に起して拵へませう」と开處で筆を執つて女子供にも判る樣にと平假名で認め　二「では此れを版木屋に賴むで大急ぎで彫らせそれから一萬枚ばかり拵へる樣にして下さい　亘「へエー一萬枚

錢「そッ其麼に要りますか」

『壇家の人等や驚いた、如何に盛んな法會とて一萬枚とは仰山ぢや法會の者には膳部も出る一萬來たれば一萬膳、半分來たつて五千膳三分の一でも三千ぢや、豪い騷ぎをやらかすと一同顏を見合はせた



が、元來奇僧の一休和尙、何れ思案のある事と。』

亘「それでは早戻りまして版木屋を賴み早速撒紙が出來上ります、それを持たせて御手傳ひの者を寄越す事に致します　二「何卒左樣して下さい」と茲で壇家の者は立歸つて手配を致します、やがて出來上つた一萬枚の撒紙、持つて參りました多勢の手傳ひに申附けて、

『洛中洛外言ふもさら、近江丹波や若狹の邊河內大和と歩まかせ。』

手傳「江戸長崎や國々へ　二「コレ〳〵餘計な事を申すな……何しろ御苦勞だが手の届くだけ配つて呉れる樣に　一同「へい畏りました

と開處で此撒紙が十里界隈へ配られます、元來一休は當時隱れもない名僧、撒紙を配つてまでの法會とあつては、さぞ有難い事であらうといふので、その當日と相成ますると大宮通りは大德寺へ參詣の人雜踏を致す位ひ。

『紅屋錢久それ〳〵の重立壇家の世話役は朝未明より詰めて居る、表門には竹の柵、區切をつけて百人ヅヽ、鐘を合圖に案內する。』

イヤ來る事〳〵自宗他宗の區別がないのでムいますから、御信言の口は揃いませんが參詣者は實に大層なものでムいます。

『時に打出す半鐘に、係りの者は立出て、先に集まる百人を本堂の



方へと案內する、正面には夫釋迦一躰、周圍に開らく金色の、蓮華にうつる燈明や、天蓋たなびく香の烟』

金欄の打敷の上に先住華叟禪師の御位牌が置かれ其前にズット百人前の膳部が列べてございます、亦本堂入口に柱には賽錢供物一切禁止候事と記して貼札がしてございます、是を見た參詣人は△「ナア如何だい豪いものだな、成程一休樣は評判の通りだ、何の宗旨と言はず兎角坊樣といふものは有難いのを賣物にして、ヤレお冥加錢の何のと取りたがるのを、祇園の祭禮にも負けない此ゐらい參詣人を集めて、百人ヅヽ交代へに此膳部、而して供物さへ取らぬといふ

此貼札、實に恐入つたな　○「ウム全く豪いものだ、俺は他宗の者だが、これぢやア宗旨を替へざアなるめへ　×「えッ氣取るないなどゝ大喧ぎ、誰れ一人とて感心しないものはございません。

## 十三

『身を墨染の袈裟法衣、立出られし一休殿、見れば可愛ゆき和尚振り、知るは兎に角、名のみ聞き初めて茲に見る人は、これが噂の名僧智識、此大德寺の僧正か、さりとては又さりとては世に稀らしき御方と皆驚きて居たりける。』



大柄ではございますが未だ和尚樣といふのもお可笑いくらいの少年でございます、成程評判にのみ其豪い事を聞いて、什麼人かと想ふて茲に初めて見た人は驚くのも無理はございません、參詣者皆恐入つて御挨拶を致しますと、一休樣は一同に對ひまして　一「皆さん今日は宜うこそ御參詣下されたゝ、何卒御遠慮なく膳にお座り下さる樣　皆々「ハイ〳〵お有難い事にございます」と一同喜びで膳の前に座りまして御供養頂戴を仕りますと、其膳に鳥渡手を附けましたが何事か何れも妙な顏をして妙に笑い出しました、

『こは又何とせし事ぞ、供養の膳部に何笑ふ笑ふが無理か無理ぢや

ない膳部に並べた平椀の蓋をば取ればその中は糠が一杯盛つてあるこれは如何にと猶見れば向ふづけからお壺まで殘らず糠の盛つけぢや妙な顏をも爲樣筈、何から何までみんな糠、こりやみなぬかの御馳走か、イヤ成程と氣が着けば、妙な笑ひも出樣筈。』

一『さアさア遠慮無しに喰られて……濟むだ御人は何分に參詣人が多勢ぢやで入交つて下さる樣』

『と一休殿は澄ましたもの、笑ひながらに一同は、こりや折角の御馳走ぢやが、御趣向だけて恐入る、さらば代つて又次ぎの人。』

と何れもお話の切塲の樣な言を云つて、莫迦々々しい樣なものゝ



其頓智に感心して、又後から入る連中がやられるのかと想ふと猶々お可笑く、クスリ〳〵と皆出て參ります。

『又打鳴らす半鐘に、代つて入る又百人、皆みなぬかの御供養に、クスリ〳〵と戻り行く五度八度交へ代へて、何時かその日も暮近かく。』

殆ど一萬に近い參詣者を通しました、何は兎もあれ盛んな事でございます、表門の方に朝から働いて居つた紅屋錢久などの檀家の世話役連中、漸く參詣人も絶へましたので、本堂の方へ參りました、

一「和尙樣さぞ御草臥でございませう」一「イヤお前さん方もさぞらい

御苦勞でござつた、師の坊もさぞ滿足せられた事であらう、さアさ何卒御膳にお着きなさい。』「ヘエ有難う存じますが、私共今日は御門の方にばかり居りましたので御臺所の方の樣子を存じませんでしたが御本膳で彼れだけの參詣への御馳走實に豪い事でございます能くまア間に合ましてございますな、イヤモウ恐入りました、何うですい錢屋さん我々も頂きませう。』「左樣よばれませうさア皆さん御一緒にでは和尙樣遠慮無しに……」と世話役一同膳に對ひ、

『蓋を開いてコリャ如何ぢや。』

『オヤア何だいこれは錢屋さん』「ウームみんな樣だ」と世話役



一同明いた口が塞がらない、

『此時一休殿頻笑みつゝ、夫みなぬかの馳走ぢやと云ふのを聞いて一同は、思はずプッと吹き出したが。』

『イヤ何うも驚きましたな……道理こそ參詣人が妙な事を云つて行くと思ひました、まア賽錢や供物を納めさせませんから怒つても行かぬ樣でムいましたが、もし納めさせた節には豪い騷ぎになつたでムいませうナア錢屋さん』「ウム此れは和尙樣チト酷うムいましたナ」「だが彼の撒紙にも確然とみなぬかと書いて置いたではないか」と例の澄ましたもの一同呆されながらも亦其頓智に感じ入つ

て了ひます、

『此れ決して徒らの智惠ならず、釋尊も夫宣まはく緣無き衆生は度し難し、然れば斯くして人を寄せ、何時かは諭し濟度せん、是れも佛家は方便ぢや。』

何でありませうと一日に一萬からの人を集めましたのは豪いものの亦此莫迦にした樣な糠の膳部を出して一人として怒る者もなく皆感心して戻つたといふのも自然一休樣が道德高きに依るのでムいます何しろ寄拔なる法會を致しましたるより彌々一休の名は擴まり實に凡ならぬ僧であるとその評判は高い上に高く相成ました。



『滑稽洒脫奇智頓才、內に極むる禪の奧、德を施し善盡し、茲に重ねる幾星霜、出て彌々生佛、其打つ鐘は十方世界、響き渡つた一休禪師。』

## 十四

『茲に京都の片傍り、その名も高き鷹ケ峰に邸搆へたその人は蜷川新左衛門親政とて、當時京都の寺社奉行、其學博く才秀れ、實に立派なる武士なり。』

武道は元來、神儒佛の三學を究めて、眞に床しい人でムいます、

此人豫々一休禪師の事を聞き及びまして折あらば一度目通りを致し其如何に學力があるかどの位博識であるかを試して見たいものだと想ふて居りますと。

『時に八月十五日、岩清水八幡の放生會、是人皇七十一代後三條天皇の御宇、延久元年その月より年々勅使賜はりて茲に行ふ放生會。』寺社奉行たる蜷川新左衛門、例年御出張に相成る然れば今日も服を正して馬に打ち乘り鷹ケ峰の邸を出でられやつて參りまするその途中。

『通りかゝつた大宮通り、此處大德寺新樹庵、暗に高き名僧の在ると



と想へば慕はしく、手綱ゆるめて眺め行く、恰も此時門前に佇立みありし其僧こそ、即ち一休禪師なり。』

新左衛門は馬上よりハ、ア彼れが禪師であるなとは直ぐに識りましたが、役目の途中ではあり且は未だ茲に見るが初めてなのでムいますから其儘に過ぎますと、それを見た一休禪師、禪師も亦豫て新左衛門が秀れたる武士である事を聞き知つて居り、そこが以心傳心といふのでムいませうかオ、これが寺社奉行の蜷川だなと心着きましたが、それとは呼ばず當二「アイヤ馬上の御武家」と聲をかけました、豈夫默つて居る譯にもゆかない、

『馬上ながに振向いて、會釋をなせば一休禪師。』

二「八幡の放生會へ出向かるゝか、御苦勞に存ずる、して何方の道を行かれるな」

『此時蜷川新左衛門、前に差たる扇を拔き半ば開いて禪師に見せ、斯樣參ると氣轉の答へ、其れ見た禪師は高笑ひ。』

二「アハヽヽ、御武家摸字を書きなさる、字は正しくなされ、重い御役の御身であらうに」

『云ふて其儘門の內、入り給ふに新左衛門思はずハッと赤面の、半は開いた扇の答へ扇といふ字を二ッに分けて戸羽から行くとの答へ



ぢやが、成程摸字ぢや字が違ふ、トバと書くのは左樣ぢやない、山城のトバのトの字なら鳥といふ字を書いて讀む。』

あゝ成程一休禪師は豪いと感服をした新左衛門、其日は其儘岩清水八幡へ出かけたが改めて大德寺を訪ね一問答しやうといふ考へ

『是より四五日過ぎて後、一日御用の御暇、蜷川新左衛門親政は、供をも伴れず唯一人、やつて來たッた紫野。』

大德寺の玄關へ參りまして

新「見る通りの者だ」△「ハヽアど何方から」新「頼まふッ」△「ドーレ誰方樣で」

て參つた」△「成程……」新「向ふから其門を入つ

『取次の弟子は面喰ひ其儘奥へと駈込むで。』

△「和尚樣妙な武士が參りました」「フム何方から參つて」△「エート其向ふから御門を入つて……」

「白痴奴何を云ふ」△「イヤ其武士が左樣申しますので」「何ぢや其武士が左樣申す變つた武士じや、名は何と申した」△「唯見る通りの者だと言はれます」「フーム、それでは貴下に御兩親はあるかと聞いて參れ」△「ヘエ」

『これは和尚も變り者、とんだ取次する事ぢや。』

△「御待遠う樣で」新「如何にも待遠うだ」△「就ては貴下に御兩親が



御在でしようか如何で」新「父母は在る、父は天地乾坤、母は地水火風」彌々變り者だと思つて取次は△「和尚樣父は天地乾坤、母は地水火風」「イヤ面白い夫ではな、貴下の御國の寶は何だと聞いて參れ」△「ヘイ」イヤどうも取次は驚いた△「エ、伺ひますが貴下の御國の寶は何でムいます」新「ウム國の寶か寶は數々あるが、先づ能く聽師に告げろ」

「雀はチウ〳〵、鳥はカウと妙な口して大きな聲」

△「ヘエ」と呆れて又も奥へ參り△「和尚樣、國の寶は數々あるが」

『雀はチウ〳〵鳥はカウ』

△「と斯樣申します」

『聞く禪師には膝打つて、忠孝國の寶とはさて立派なる答へかな、其答へする武士なら、名は問はずとも蜷川ぞ』

二「コレ蜷川新左衛門殿能く見へられた、此方へと申せ △「イヱ其方はお見へでは厶いません 二「イヤ其只今參つた武士に左樣申せばよい相解る △「ヘエー彼の雀はチウ〳〵の先生……… 二「何だ解りもせんで生意氣を申すな早く參つて叮嚀に御通し申せ

『莫迦氣た言やら叱言やら、兎角禪家にや妙な客』



ブツ〳〵愚痴ながら玄關へ參り來した取次の僧 △「ヘヱ蜷川新左衛門殿此方へ御通りを、

『其名差されて蜷川は、過る日門邊に會ふとても名乘もなさず去りけるに今日も僅かに玄關口、顏も見ずなる問答に其れと其名を知られしは、あゝ豪いかな一休禪師。』

とモウ感心を致して新左衛門は取次の案内に禪師の居間へ通りまする

『居間の眞中の机の前、褥の上に座禪して、如意を片手に一休禪師』

二「オ、能く見へられた此方へ　新「ハッ、禪師過日は役目の途中として失禮仕りました、久しき事一度御意得度と思ひ暮しましたが、勤務繁多に致して折もなく、今日は漸くに一日の閑、御邪魔に罷り出ましてムります　二「イヤ左樣か御身却々博識と聞き及ぶ、一休が修行の對手して下され　新「恐入りまする、世の事人の事さて却々に解らぬ事ばかりお敎へは受たく、就きまして早速ながら伺ひますが

二「はて何をな　新「はい」

『熟つと顏見た新左衞門。』

新「禪師、人間死むでから後は何とムりまする　二「人間死して後か



な、左樣……」

『莞爾笑つて禪師には、次間へ向つて手を叩き。』

二「コレ誰れか、臺所帳を持て參れ、」

『何やら不思議な答へが出さう。』

## 十五

『人間死して其後は何となるかと蜷川が、問ふを笑ふた禪師殿、如何な答へをなさるゝか奇想天外臺所帳。』

聽てお弟子が持つて參つた臺所の奉納帳、妙な物を取寄せたと新

左衛門不思議相な顏をして居りますと、禪師は其帳面を展きまして

「イヤ死むで後は何になると云つて、まア種々な物になるな、宜いか聞きなさい」

『米屋の源兵衛は湯葉が五把、伊勢屋の藤助大豆が五升、鍛冶屋の源太は椎茸ぢや。』

「先づ這麽工合大方寺の茶の子になるな　新「へエ成程、ではもう一ッ伺ひますが地獄極樂といふ事を申しますが彼れは在るものでムいませうか　「白痴だなお前は……　新「へエ　「へエではない苟も寺社奉行といふ大役を勤めながら、地獄極樂が解らんのか、さて〳〵呆れた男だ、聞けば却々、博識との事であつたか地獄極樂を問ふに至つては情けな過ぎる、左樣な事で奉行を致すなど身の程を知らぬといふものだ、イヤ祿盜人とや申さう、確りとせよ新左衛門」



『言ふや禪師は如意振上げ、新左衛門が肩先を丁とばかりに打叩く。』

イヤ新左衛門此時怒つたの怒らないのぢやアない、

『見る〳〵面色朱の如く、餘りと言へば無禮ぞと思はず掴むだ刀の拵ヂリ〳〵と、膝を乘出す。』

新「イヤサ禪師身不貧ながら、新左衛門、寺社奉行の役勤め居る、祿盗人とは何事でムる夫第に依つては容赦致さん」と今や抜き放さん息込み、

『此時騒がず一休禪師、抜かんずる鞘如意にて押へ。』

二「斬るとか新左」

『夫れ開處が即ち地獄なり。』

新「ウムッ　二「解つたか　新「新左　新「ハッ」

『刀を開處へ投げ出して。』

新「無明の夢の覺めてムる　二「オ、」



『夫れ解れば其處が極樂ぢや』

新「恐入ましたお蔭樣にて地獄極樂の意相解りまして厶る、さて亦禪師樣經文の中に邪正一如といふ事がありますが、ありや如何なる理由でムいますか　二「ウム其れはの斯樣ぢや」

生れては死ぬるものなりおしなべて
釋迦も達磨も猫も杓子も

夫れ人間の邪正は一如死すには善惡差別はない。

新「然れば色即是空と申しまするは」

白露の己が姿を其儘に

紅葉に置けば紅の色なり

「何うぢや會得がゆくか　新「恐入ました、猶伺ひまするが、开も人間の一生は」

世の中は喰つて糞して寢て起て
只その跡は死ぬるばかりぞ

「其れだけのものぢや　新「成程、では佛法の極意は　「ィヤ大分問が深くなつて來たな、佛法の極意は難かしい、細毛の如しと言つて誠に僅かの處にある、左樣さの俺の思ふ處は斯樣もあらふか」

佛法は鍋の月代石の鬼



繪に措く竹の友摺の音

「解らぬ中に解るが極意　新「能く合點が參りました」と茲に蜷川新左衛門聞きしより猶秀れたる禪師の名智に感じ入つて　新「實に今日は數々の御教へを受まして厶る、此後とも何分宜しく御諭を願ひます、今日は是れで御暇を致しまする　「左樣か」と禪師は別にまア宜からうなどゝ引止は爲ない其儘玄關へ送つて出る、此時新左衛門又禪師に對つて、新「禪師もう一ッ伺ひ殘した事が厶るので　「何かな　新「在家で克く百萬遍と申して勤めまする時、南無阿彌陀佛といふものありますれば中にはナンマイダ〳〵など、申すのがありま

すが、如何も妙に感じられます、南無阿彌陀佛なら南無阿彌陀佛と云つたら宜からうと存じますが、彼のナマイダと云ひますのは一体如何いふ理由で」と尋ねました、斯樣いふ問は誠に詰らない言の樣で難かしい、禪師も此れには鳥渡困つた樣 二「其れは俺は知らない皆が勝手次第にやるのだからな」と誠に確然としない答へでムいます、

『漸と此時新左衛門一ッ、問答に勝つたる心地、然らば御免と立出る』

すると禪師が 二「アイヤ蜷新々々と」呼びました 新「ハッ何か御用で 二「アハヽヽ、蜷新と申したら返言を致したな 新「左樣拙者は



蜷川新左衛門、其れ故蜷新と呼ばれたのでムらう 二「如何にも左樣ちやが、イヤ克く解つたな、開處だ新左衛門」

『其れが解ればナマイダも南無阿彌陀佛も同じ事。』

二「如何ちや 新「ハッ又恐入ました 二「ちや其内お出で、俺も思ひ立てばお前の處へ往かうよ 新「其れは有難い事で、お出下さるは何日頃 二「左樣さな」

暗の夜に鳴かぬ烏の聲聞けば
生れぬ先の父ぞ戀しさ

二「其内に行く 新「お待申す 二「住居は 新「此處より半里ばかり西

の方、高ケ峰に厶ります　二「ア、左樣か兎角坊主は西へ行くものちやでは近日　新左樣ならば」

## 十六

『茲に四五日過ぎて後、一休禪師に於れては、新左衛門を訪はゝやと紫野をば出られて鷹ケ峰へと差て行く。』

京都の町を放れまして半道ばかり參りましたが、如何に名僧智識でも初めて來る處で厶いますから、フト迷ひ込むだものと見へまして大層景色の佳い處へは出ましたが、高ケ峰の見當が着かなく相成



ました、

『然れば聞くより爲方がない、道行く老爺呼止めて。』

二「其れへ參る爺さんや、高ケ峰と申すは何の邊ぢやな、蜷川新左衛門の屋敷へ參る者ぢやが敎へて貰ひたい　爺「ヘイ」

『と老爺は振向いて答へ爲樣とする途端、後方の松の木蔭より聲高々と張上げて、

極樂の道を敎へる坊樣が
此世の道を俗に問ふとは

言はれたので禪師は振返つて其方を御覽になると、外ならぬ蜷川

新左衛門でムいます　二「やア新左衛門其處に居たのか　新「左様で今歸邸の途中、道をお尋ねの御様子故、鳥渡即吟を申上げた次第、禪師御返歌を求めます　二「オヽ」

と答へ一休殿、

行先の宿を何方と思はねど
踏迷ふべき道もなきかな

すると又禪師のお傍へ寄つた新左衛門

一人來て一人で歸る道なるに
道教へんといふぞおかしき



二「ホヽウやるな新左」

一人來て一人で歸る道あるか
二筋歸へる道を教へん

新「ハテ二筋歸る道と申しますと　二「天地陰陽即ち地獄極楽滅後の二ツ　新「ハテ成程」

「道々も道を教への歌合はせ、時に楽しふ笑ひつヽ、新左衛門の案内に、其屋敷へと來たられる。」

さて新左衛門は妻女共々にお待遇を致し、又禪師は悟の道の御物語を四方山と遊ばされる、時に新左衛門は改まつて　新「禪師様、私

禁貴僧のお弟子にして頂きたう存じますが如何なもので」「い、や坊主になりたいといふのか、詰らんではないか」

「悟なば坊主になるな魚喰らへ

地獄へ行つて鬼に負けるな

「なら、然様ちやないかと、仰せになりました、成程天窓を圓めたからと云つて眞の出家ではない、色慾の爲に身を果したり心に五戒を破つたり致す者も澤山ございます、又は方便の爲に出家を致す即ち貪僧などもある、然れば別に出家致しませんでも、心を清く行爲を正しくさへすれば其れで宜しいのでございませう、开處で禪師が



斯樣のお言葉、一々新左衛門は感心致しまして 新御尤にございます、然しどうかお弟子にして頂き度いもので 「そりや強てと言ふなら致さぬでもないが、今俺の弟子に相成れば奉行の役を退かねばなるまい、急かに退いては其れが爲に迷惑を致す者も出來樣、出家して世の人に迷惑をさせる樣では何にもならん、まア〳〵是から五年なり八年なり過ぎて、悟に世を讓つて後にしたが宜からう」

「俗にあちらと五常を守り、五戒は口に說かずとも身に保つなら其れで可い。」

「まア隱居でもしてからにしたが宜るしい其時は必ちず弟子にし

て上げやう」と論されましたので、新「ハイでは其れまで俗の世に盡しませう隱居でも致しました節は何分御願ひ申します　一「ア、夫れは承知した、時に新左衛門今日は些遠走りではあるが是から叡山へ登つて見やうと思ふが何うだい同緒に參らんか　新「夫れは面白い事是非お供致しませう」と共に氣輕なもので、新左衛門直ぐと支度を致し、禪師に從ふて高ケ峰を出でられる、

「夫れ人皇五十代、桓武天皇の御宇、即ち開く比叡山。」

一休禪師登山に及ばれますと、當時、御年若ではありますが稀代の名僧と謳き渡つて居る事でございますから、叡山本坊の僧一同御



出迎ひを申上げる、是れより案内に依つて寶物などを御覽に相成つて居りますと、この叡山の學寮にある若い連中此方に於て相談を始めた」

「當時名代の新樹庵、豪い者ぢやと聞くけれど何れ程學に秀れてか如何程悟道を究めてか、問答仕懸けちやどんなもの、一人が言へばソリヤ不可ぬ、兎角禪家は口巧者、況して有名の一休禪師、說破られる位、知れた事一番何ぞ考へて、唯困らせる工夫をしやうそれは妙ぢやと各々に腕こまねいで智惠しぼる。」

すると中に一人「どうだな三千人、宗徒からの御願ひぢやと言

つて、「卿卒」字だけで宜しいからと三千枚の紙を綴いで一字書いて貰ふのだが、是れには如何な一休禪師でも困るだらう。○「イヤ面白いな其れは、貴僧却々大智識だ」あんまり大智識でもございません。

「態て相談一決して、今や禪師は書院の方、御休息ある其處へやつて參つた學寮の僧。」

○「エ、ー禪師樣には今日は克くこその御登山、就きまして甚だ恐入るお願ひにございまするが、私共は當學寮に居りまする天臺修業の僧にございまする、禪師樣當山へ御入遊ばされた御紀念に、三千



人の宗徒より三千枚の紙を持參りましたが一字で宜しふございますから何卒御揮毫を願ひ度いものです」

「如何でございると困らすつもり、禪師の顏をば見上げれば、何其麼事困らうぞ、莞爾々々笑つて打頷き。」

「三千枚へ一字、ハイ宜しい、綴いでありますかな」

## 十七

「觀山學寮の僧一同、禪師が平氣な顏でハイ宜しいには少し驚いたが綴し三千枚へ一字は尋地に成て出來るものでない、忽ち降參する

に違ひなしと先づ計略巧しと手を打つたが、[illegible]

「然し言ひ出しや此難題、初手から降參する事と思つて居たとは チト違ふ、然樣云ふ答へしや兎に角に、紙を三千綴がにやならぬ、墨も何升か摺らねばならぬ、これも却々大仕事。」

其れでも多勢の仕事は早うございます、やがて紙は綴き上つた、何しろ三千枚といふのでありますから卷いた處を見ると道普請の時土方がころがして行く石程でございます、摺つた墨は四斗樽に半分といふさわぎ、如何に何だつて此紙へ此墨でたツた一字といふのだから一休禪師だつて弱はるに極まつて居ると、再び若僧連中は參りま



して、「禪師樣紙墨の用意は出來上りましてございますが、何分に三千枚をつなぎましたのでとても院内では御揮毫頂く譯に相成らんと存じますが如何な工風に致しませう」「其れではな俺はモウ立歸るから歸り道に書いて進せるに依つて其紙をな當院の玄關から麓の方へズッと布いて下さい」と言つて立上つた一休禪師、

「法衣の裾をば端折り上げ、新左參れと玄關口へ、若僧原は紙をば抱へスル〳〵と麓の方へ擴げて布く事十八間、墨の四斗樽がつぎ出す。」

「其内」人の僧が筆を持て參ります、流石は叡山の事で實に素晴ら

しい立派な物。

其筆執つた一休禪師、籠の方へ白妙と流した紙をば眺められ、莞爾笑つて頷いたが、墨の樽へと筆を入れ、ドボブリ含ませ執り直し紙面へ落すと見てあれば、筆の先をば引摺つて、籠の方へと駆出した。

其跡から何れ這麼事だらうとクスリ〳〵笑ひながら新左衛門も其に駆けて行く、オヤ驚いたのは若僧原　○なんだい此れは……と一同明いた口が塞がらない、やがて禪師は紙の末迄で引摺つて行つた筆を振廻曲げて、呆きれて見て居る若僧原の方へ勢ひ大きな聲



で呼はつた。「さア出來上つた、一休一代の名筆、誰れにでも讀め様、それ李假名のじの子、望みに從つて斯くの通り」

「新左歸らう、ハイ左様なら、ヤレ疲勞だと筆投げ捨て、其儘禪師は歸山する。」

一休禪師奇行中の奇行、流石の新左衛門も籠へ下りた時、禪師の顏を暫く眺めて呆きれて居りました、然れば叡山學寮の連中が呆き れ方は一通りではありません、

「汝はさゆながち、巧みの難題笑ふて書いたしの一字、當意即妙禪道の極意は其れに知られけり。」

後に至つて此じの字の筆蹟は叡山延暦寺の寶物となつて秘の置かれたといふ事でございます、さて是より禪師新左衛門の兩人は叡山の麓を右へ山の鼻を巡りまして、蓮臺野といふ處へ差懸りますと、

『フト道端の蒲鋒小屋、身は物乞ふを營みのさりて、此れは面白やいぶせき小屋の門口に、筆も美事に氣儘庵。』

是を見られた禪師は、悲しかるべき乞食の身に氣儘庵とは悟りある事、凡ならぬ者だらうと思召されましたに依つて、近寄つて其小屋の内を覗きますと、

『齡ひはやがて六十路かや、むさき姿はしたれども、何處か床しさ



面影に、仔細あるべき身の果と、問はでも知るさすね者よ、缺けた茶道具、ひゞある茶釜、されど立前美しふ、襤褸には さむ破れ帛紗。』

今お茶を立て居る樣子でございます 二「新左衛門鳥渡覗いて見ろ世には美しいものがあるな」と言はれたが、乞食小屋を覗いて美しいなどゝ亦妙な言を云ひ出したと新左衛門は變な顏をして 新「禪師何か存じませんが乞食小屋などをお覗きにならんでも好いではございませんか、ハヤ暮近うございますチト急がうではありませんか、

「暮るのが何うする、ヤレ〳〵度し難いな俗物は、マア見よとい

ふにあゝ床しい美しい……オイ〳〵氣僧庵の庵主や」

「蒲鉾小屋の菰垂を上げ、ズッと入つて乞食の傍。」

「一吸よばれたいな」

「乞食はびつくり禪師を見たがそこは稼業で油斷はない。」

乞「コレハ〳〵御出家樣や、旦那樣」新左衛門は彌々呆されて立つて居る「オヤイヤ其樣な聲を出さんでも宜い、志は遣はすが、斯樣な小屋に似合はぬ軒の文字と言ひ今立て居る茶の手前、床しふなつて思はず入つたのじやが一服所望したいな」乞「其れは忝ない事でございます、御所望とあれば恰度幸ひ獨り立て獨り樂しむも味で



はありますが、お客を受ますれば又一段、さアさ其方に御在の御方もお入り下さい、つまらぬ御遠慮は茶の味合を消します」「然樣々乞コレ新左衛門遠慮せずと入つた方が宜い」誰れが遠慮をするやつがあるものか、

「鼻がつかへる何だか臭い、乞食の住居でお茶の會は、禪師もあんまり道樂過ぎる、身不肖なれども新左衛門、當時京都の寺社奉行、聊か困つて苦い顏。」

「新左衛門何だ其顏は、折角庵主の言葉ぢや入んなさい」

## 十八

『問はゞ仔細のあるべけれ、問ふは俗なり問はぬが悟り、悟り澄ました莚の茶の會。』

困つた樣なものゝ元來新左衞門も禪を究めて聽て一休禪師のお弟子にならうといふ人でムいますから又興を覺へて共に其小屋へ入つたは宜いが何しろ小さな蒲鉾小屋に大男が三人は窮屈此上ない、然し風流の味は格別乞食も乞食の量見では居りません、

『茶杓を拵へた亭主振り、京の七野の其一ツ趣き深き蓮臺野、時し



も頃は行く春の、こゝら邊の夕景色、墨繪に書かん其姿。』

禪師は何とも云へぬ心持の可き、殊に美しい其茶の立前に感心をして、『イヤモウ庵主や今日は思ひもかけぬ馳走なので、忝じけない、就ては又何れ訪うであらうが俺の寺へもチヤ遊びに來なさい、紫野の新樹庵といふのじや、乞ェッ』『ては貴僧樣は大德寺の一休樣でムいましたか知らぬ事とて失禮を申上げました何卒御勘辨を、私は眞しき以前より當所に居ります六歳と申す者にございます、』『あゝ左樣かい六歳と云ふのかい、お前は蓮臺野氣德庵の六歳。俺は紫野新樹庵の一休、似たものだナ、此處に居るのは廢ヶ峰の蜘新と云

つて是れは少し俗物だてい六「ハヽヱ」鷹ケ峰の蜷新……其れではあの寺社奉行の蜷川新左衛門様でございますか　二「あゝ左様だヨ、成程俗物も……」新「コレ〳〵何を申す禪師と同緒になつて遠慮の無い奴だ」六「それは貴下は先刻私が庵へ御入りなさいと云つた時に厭に遠慮して居ねからで、アヽ俗物は度し難い」二「イヤ六藏感心〳〵露の住居を面白しとして居るお前や、三界無庵の俺などが眼から見れば未だ〳〵俗物だなアハヽヽヽ」と禪師は面白がつて居る汚ない小屋で窮屈に座つた乞食に茶を振舞れて俗物まで言はれヽば澤山だと新左衛門も閉口したが然し大人でございます、誠に面白く



嗤えて打笑ふて居りまする、フト禪師が御覽になると六藏の傍に短冊が置いてあります故「庵主や其處に短冊があるが、今日此氣儘庵へ立寄つた紀念に何か一ツ書いて呉れ」と所望を致しますと六藏は笑ひながら「六「イヤ兎角出家は物を貰ひたがるものでございますな」

「物を貰ふて暮す身に、物を呉れよと悟りが過ぎる、然し折角お望みなら、何ぞ一首と筆執つて。」

居寢る間は人に變らぬ身なれども
明くれば變はる曉の鐘

さら〳〵と認めて差出しまするのお取上げになつた禪師　二「イヤ何うも感心だな、ウム明くれば變はる曉の鐘、斯樣言ふこそ人の本來、感ずれば又淋しからうか、よいよい此短冊の禮に引導を渡してやる何時でも新樹庵へ來なさい　六「其れは有難い事で何れ參りまする　二「では此れを貰つて行くぞ……大分喧うなつて參つた新左衛門殿〳〵出掛け樣かな、ぢや紫野へ來なさい　六「是非近々に參りまする何卒私庵へも又御出を願ひます、蟻川樣もチトお遊びに」豈夫寺社奉行に大德寺の僧正度々乞食の庵へ來られも致しまいが、

『そこが悪流、語りの德、公方に引導渡す身も、往來にどうぞや軸



乞ふ身も、同じ顏した客主人、さらばと暇を告げられる。』

『氣樓庵を御立出になつた禪師新左衛門又途中に別れまして鷹ケ峰も紫野へ歸られまする、

『其れより四五日過ぎて後、新樹庵なる禪師には、先住よりの附き弟子たる杢道鐵梅其他の者、檀家の衆を寄せ集め、諧謔頓智面白く悟道の教へ禪學の御物語の折柄に。』

『玄關の方より何か妙な顏をして參りました番僧　番「申上げます

二「何ぢや其麼顏を致して　番「ヘエ只今玄關へイヤモウ汚ないの汚なくないのと云つて其れはお話になりませんお乞食が一人參りまして

禪師様御在寺なら是非お目に懸りたい、先日御立寄の際は失禮を致しましたなどゝ申して居ります大方氣狂ひだとは存じますが、一應申上げます　二「イヤやつて來たな、此頃堀出した話對手、何だ氣狂ひだなどゝ失禮な言を云ふな、此間立寄つた際に約束をした事があるので參つたのだ、本堂へ通しなさい　雲「えッ彼の乞食を……御心易いので　二「アゝ友達なのだよ　雲「へエー、然しあまりに汚なうございますが彼の儘本堂へ通しましては　二「汚ない〳〵と申すな其れが稼業だ、跡で掃除さへすれば何でもない　雲「成程」

「何うせ天下の變り者、あんな友達もあろ筈か、何は兎もあれ驚い



た。」

禪師のお傍に居合はす者も、執次の番僧も呆きれは致しましたが這麼事は珍らしくもありません、玄關へ參りまして番僧　雲「何卒本堂へ御通りを」

「とは言ひたれど何がさて、汚な細工の念入に、案内するのも鼻に袖、乞食の六藏は澄ましたもの、坊主の法衣に乞食のつゝれ、是が私の禮服と玄關上つて本堂の方。」

廊下へ足の形を殘して參ります、此方は禪師約束の引導を受けに來たのであらうと、法衣を改められて弟子を從へ本堂へ出る、

見れば本堂の眞ん中に、おんぼろ姿の氣僅庵、乞食の六藏は座して居る。』

## 十九

一「イヤ、六藏能く見へたな、先日の茶の味合忘れられぬワ」六「恐入ります今日は其節御約束の引導を頂き度くて參りましたが」

「早速お授け下さるなら、身は朽果し菰垂に浮世を捨た氣僅庵、其生前に比類無き名僧智識の引導は、實に有難き事ぞかし。」

六「何卒お願ひ申します」一「ウム諾々、只今引導を授けて遣る」と



言つたが何を案じたか禪師後方に居る鐵梅に對ひまして一「コレ汝庭の池へ參つて龜の子を一ツ捉まへて來なさい」鐵「ヘイ龜の子を、なに、何になさいますので」

一「是は不審に違ひはない、引導渡すに龜の子が御用にならうたこりゃ奇妙。」

鐵「彼の生きた龜の子をでムいますか」一「左樣だ早く捉まへて參れ」鐵「ハヽア、では禪師樣引導の前に召喰りますので」一「莫迦な言を申すな龜の子などを誰れが喰べる、マア可いからさツさと生捕つて參れ」鐵「ヘイ」

『何れ變つた不思議な引導、什麽事をばやるのやら、對手は乞食の變り者、禪師は類無し天下の奇人、生きた龜の子道具に使ひさても變つた法式じや。』

繞て鐵梅は池から大きな龜の子を捉まへて參りますと　「ウム よし〳〵此方へ寄越せと、如何なる引導を渡すのかと熟つと禪師の顏を見て默つて居ります六藏の前へ龜の子を置いて、片手で其甲羅を押へ、片手で其出し居る、首や手足をチョイ〳〵と叩いて引込めながら　「夫れ六藏、今俺が前代未聞の引導を渡してやるぞ」

『と一咳、咳、禪師、聲をば張上げてチイ〳〵と出す首、チョイと



出す手、龜を叩きつ言はるゝは。』

手を出すな足を出すな尾を出すな

六ッ藏めたとは即ち六藏に因むだので、龜になぞらへた此引導の歌は、他でもない其れと訊しはいたしませんが、元來の乞食では無い蓮臺野の六藏多分は亡びた南朝の臣の成れの果に相違無いと察しられたに依り斯樣諭されたのでムいます、

と仰有つた、六ッ藏めたとは即ち六藏に因むだので、龜になぞらへた此引導の歌は、他でもない其れと訊しはいたしませんが、元來の乞食では無い蓮臺野の六藏多分は亡びた南朝の臣の成れの果に相違無いと察しられたに依り斯樣諭されたのでムいます、

『世をすねりやこそ身を捨てる、悟らうとても根は凡夫、時に想はん頃の夢、穩かならぬ事もあろ、そこを手出さず足出さず、身を保

て上と謂し言。』

此引導を渡された時に六歳、思はず後へ退りまして　六「禪師樣有難う厶りまする悟り澄ましたつもりでは居りましても、時折想ふ世のさまく、今其引導を頂きました眞迷ひの夢も醒ました　一「オヽ左樣か其れで何時死すも成佛は疑ひないぞ」と茲に於て六歳は大きに喜び、其龜の子を貰ひ受けて此れを放し、蓮臺野の庵へ立歸りましたが其後程なく老る年齡の枯るゝ病ひに氣衰庵に於て清き往生を致したといふ事で厶います、さて是より致して一休禪師は彌々其道德高き事洛中洛外に響き渡つて、敎へを乞ふ者論言を願ひ出る者な



と引絕なし實に夥しい事で厶いますする、と茲に七月盂蘭盆會の事此京都に於ては年々の例で厶いまして大內へ諸寺諸山より燈籠の納める事に相成つて居りまする、燈籠と云つても却々一通りの物では厶いません各々趣向を凝らして各寺壇家等が皆力を入れる大層なもの、麓が大德寺新樹庵に於ては新住の一休禪師に相成りまして以來其盛籠納めを致した事が厶いません、すると丁度當年は大德寺が年番に當りましたので、其前月斧宗各寺の住職が打集つての評議に際して、一休禪師への案內が厶いました、然らば其席へ出なければならない。

『佛に盡す僧侶の身が、華美を競ふた献燈式、悟りの道にありながら其麼評議は氣に入らぬ、嘘俗なるかなとは思はれたが、何か思案の禪師には、評議の席へと出でられる。』

前々申上る京都は寺の多い處、何しろ例年大内で御待設けになつて居る献燈の大會式其下相談と云ふのでムいますから却々大層なもので殊に謂はゞ當時賣出しとも言ふべき新樹庵の一休禪師が出席したので一際息込みが強い、東福寺南禪寺妙滿寺本願寺其他打集つた各宗の住職連中。○「ヤア此れは新樹庵殿御苦勞に存じます」「イヤ御一同にも御苦勞な事で。」△「就てはな新樹庵殿早速でムるが愈々來



月十三日までにはお互ひに燈籠を造らねば相成らん、殊には當年は新樹庵殿は年番にも當ります事、さぞかし御趣向な物を御造りでムならうが如何な物を御造りになりますか。」「左樣先住が逝きまして此方當年が初めての事、一ツ俺は前代未聞、恐らく是までに類の無いといふゑらい燈籠を拵へ樣と存じてもう久しき前から趣向を凝して居ります位ひ、然ばどうか貴僧方も其思召で。○「成程御考へのある事でムならうが、然し大内でも樂しまれてお待受の事でござればもし同じ樣な趣向に相成ると恐れ多いと存じて御相談を致す次第。」「イヤ〳〵其儀なら御案じにならぬ樣、俺のは一種特別決して貴僧方の

とは違ふたのを造る考へ、何卒貴僧方は御心配なく御造りを願ひたいと。是より猶亙ひの問合はせ亦式當日の事などに就て評議を重ねやがて散會致しましたが、

「當時名代の新樹庵、並ぶものなき一休が前代未聞の前觸れぢやゝ如何なる趣向に出る事か、言ふも妙ぢやが商賣敵、負けではならぬと各自々々に、住持は一心壇家の力、意匠凝して大騒ぎ。」

何しろ一休禪師が初めて燈籠絞めをするといふので厶いますから何れも例年の比ではない。



## 二十

「愈々七月十三日、競ふて茲に出來上る、各寺趣向の花燈籠、中にも東山東福寺が、意匠凝せる美事さよ、角に取りたる燈籠の丈は八尺其四隅、造り附けたる牡丹花は燃ゆるが如き緋縮緬、下へ五色の吹き流し、又南禪寺の納むるは、白絹を以て張詰し極彩色の花模樣其他とり〳〵絹縮緬、名所繪好み蓮華形、六角燈の金砂子、二間四方の大燈籠、何れ劣らぬ善盡し美を盡したる出來榮へは、實に目覺しき事ぞかし。」

昔明日てそ晴れと待構へて居りまする、處が大德寺に於てはさらに燈籠を造つた樣子もムいませんゝ他々の寺では壇家の人等が力瓶を入れて夢中で騒ぎますのに、一休禪師は衆て申出た壇家の人等へ對しては〻〻〻宜しいと云つたゞけで愈々其前日と相成ましたけれども一向拵へる氣色もないのでお弟子等檀家の連中は皆氣が氣ではあゝ出せん、一同揃つて禪師の處へ參つて 〇「禪師樣モウ一日と相成つたではムいませんか燈籠は如何遊ばす思召で、何うも他宗では豪い張込み樣でムいますが、内々何處ぞへお申附けに成つて置いて愈々當日となつた處がアッと言はせるといふ御趣向で……



〇「イヤ〳〵其廢わけではない、今日チヨツクラ自分で拵へて早速持參する考へ 〇「ヘエ〜チヨツクラ御自分で……」と一同は顏を見合はせ、

『そら始まつた禪師の皮肉、大方意外な巧みであるがさゝとてあまり身にチヨツクラ過ぎる今日の今から手細工は、聊かあやしい次第なり。』

其内大德寺は前申す年番の事でムいますから各寺より致して愈々出來ヒ及びましたる故大内へ運びますが其方に置いては宜しうムいますかと問合はせが參ります、そこで禪師は 〇「あゝ宜しいく出來

上つたら當時に遠慮無く早く運むで飾り附て置きなさるが可い」と答へて遣ります、然れば各寺よりは直ぐ樣に大内清涼殿へ其燈籠は運ばれ飾り附けられる、

『時に其日の晝過ぎて、如何なる燈籠の出來しにや、覆を掛たる釣臺に、禪師自ら附き添ふて、紫野をば出られる。』

「京都町々の人々は諸方より大内へ運ぶ處の其華美を競ふたさまざまの燈籠を皆出て見物を致し其れ〳〵月旦などをして居ります、處へ一休禪師自ら附添ふて釣臺が運ばれて行くのでムいますから、マア如何な立派なる燈籠であらうかと、覆の中を見たがつて居りますが、何分にも見へません、

『其体を見た禪師には往來の者に打對ひ。』

「コレ〳〵汝等は俺が造つた燈籠が見たいのか　甲「ヘイ他ならぬ禪師樣がお納になる燈籠拜見を致したいもので　乙「何卒御許を願ひ度うございます」

『言ふを頻笑み頷きつ、誰れにも見せる見よかしと、覆をば取るを人々は、近寄り見ればコハ如何に、漸々大きさ三尺ばかり、世に不細工もあらうとて、斯樣秀れた不細工は又とあるべきものでない、角を打つたる曲り釘、少し歪むだ紙張は、拙い手際の涙を打つ。』

イヤモウ人々は驚いて了つた、其不細工の燈籠へ禪師御筆の詩が書いてムいます其詩を讀むで心ある者は成程と感服を致すもありますが、何も解らぬ者はあまりひどい燈籠に呆れ返るばかり 「何うだ前代未聞素晴らしいものであらう、這麼燈籠は決して他にはあるまい俺が自慢の細工ぢやさア〳〵モウ宜からう」と再び覆をば掛させて、

『大内へこそ急がせる、やがて來たれる御門の方。』

門士「御献燈でムるか何れの御僧」 「拙僧大徳寺の一休」 門士「ハッ其れは〳〵」と御身分柄の禪師の事でありますから只の御出家とは取扱かひが違ひます、厚き禮に案内をされて献燈お孫、の士に御會に成う勤柯でござるな、諸出各寺より納められた燈籠の中、拙僧手細工自慢の燈籠」と覆を拂つて差出すを 士「オヤ其れは……」

『とは言つたれど二の句が出ぬ、さて〳〵何たら不手際か、暫し默つて顔を見る』

「「オヘ流石のお孫りも一休の手際に感心をされて言葉もでざらぬかアハ、、、、何卒目立つ處へ飾られたい、宜しいかな」と禪師大得意で御立歸りになる、

『さても當日夜に入れば、清涼殿の御庭前、京都諸山が献燈に壹と

輝く美しさ繪にも及ばぬ眺めなり、中にションボリ新樹庵一休殿の燈籠は目立つてさても見苦るしき。』

時に出御あらせられた、帝に於てはフト此燈籠に御目を止め遊ばしたが、其筆を御覽なされ、

『何思召給ひしか、自ら其燈消させられ、其儘他をば見給はず忽ち入御遊ばさる。』

開禪師の筆に如何なる言を書かれたのでございませうか、燈籠てそ見苦しけれ書きたる文字は實に人の及ぶ處でない、

聖靈今日出來迎　雨露直供萬葉棚



懸得燈明天上月　松風流水讀經聲

と詩を書きました末に

山城の瓜や茄子を其儘に
手向となせや鴨川の水

と認めて仏います、是れ一休禪師が無益なる事に競ふて心を勞し金銀を捨て、斯樣な式を行ふの其れとなく言ふたのでございます、然れば帝に於いても、其詩を御覽せられて御感じ深く、諸寺諸山があらぬ費へ其迷惑を思召されると共に、其文字に御心痛く自ら消し給ふて入御遊ばされたのでございます是より以來此獻燈の式は廢する

事に仰せ出されました。

『睦徒ちの奇行でない、さても禪師が其計ひ各寺の僧は言ふもさら聞く人々は誰とても感せぬ者はなかりけり。』

## 二十一

『三界衆生有緣無緣、萬靈祀る佛月、然れば此處にも、彼處にも手向けの經會盆踊、茲は京都の片田舍大瀧と呼ぶ處にて、是れも年々催しの七月中の五日より八日かけて幾夜さよ人々集ひ踊り舞ふ。』

是れ又却々大仰な盆踊でございまして、例年其催しの一日は將軍



家が御成に相成るといふのでございますから、京都町々近郷村々の者が皆樣々その工夫をして御上覽の際には將軍家から御言葉でも頂かうといふ息込み、

『何れは是も下々が、佛祀りをかこつけに、上へ諂ふ催し事、爭ふてする其趣向、是も益無き事なりと思召された新樹庵。』

何にも御存じない將軍家は年々珍らしい盆踊りを御覽になつて御樂しみになるが、這樣な謂はゞ莫迦々々しい事に下々が心を勞し金錢を費やす事實際宜しくない、是れを又お側に居る家來が勸めるなど誠に怪からぬ事であると禪師類りに思召されて居りますと、

『恰も今日ぞ將軍家が、其盆踊りへ御成の御沙汰、其れと聞たる禪師には、丁度來合はす檀家の者、先住よりの古馴染、紅治錢久竺齋など、誘ふて行かん思立ち。』

二「何うだ一ッ大瀧の盆踊りへ出掛け樣と思ふが皆同緒に行かんか噂ばかり聞いて未だ俺は一遍も見た事がないから」

「へイ其れはお供を致しても宜しふございますが、今日はゑらい雜踏だらうナア紅屋さん」

二「ア、何しろ公方樣の御上覽だからナ禪師樣あまり雜踏過ぎて見るも何うするも出來まいと存じます」

二「イヤ〳〵左樣でない詰ふも舞ふも乘の聲、其度時が一番見物ぢや同緒に行きなさい、



錢「えゝもう禪師樣さへ雜踏をお厭ひなくば私共は一向差支はございません」

二「では出掛樣其處に風呂敷包が出來て居るが誰れでも宜いが脊負つて行つて呉れ」

二「へエ風呂敷包を……一体何が入つて居りますので」

二「マア宜い默つて持つて行きなさい、向ふへ行けば分る」

錢「又何か禪師樣御趣向でございますか」

二「イヤ其れ程の事でもない、さアもうそろ〳〵出掛樣かな」

「風呂敷包を交代に、是が本當の坊主持、」

一休禪師の跡に附き、紅屋錢久檀家の者、紫野をば立出て、夕べ涼しき加茂川や、京都の町を出端れて大瀧へとぞさして行く。』

來たつて見まするとハ十間四面の竹矢來を設けました其正面の方に樓敷が出來てございまして張廻はした紫の幕は即ち將軍家の御座所でございます、

『ハヤ將軍義持公、成らせられてぞ御在なり御側に列ぶ大小名、仁木細川吉良山名其他の面々綺羅星と嚴かにこそ扣へたり、矢來の外は人の山、中は踊子の眞最中、加茂川染の衣裳やら、金絲に光る振袖をピラリシヤリと着料して、今こそ興と入亂れ、打つや柏子木銅羅太鼓。』

人押分けて此れを見た禪師は、二「さア紅屋鍵丸其風呂敷包をお出し俺も彼の中へ入つて踊るのだ 紅「えッ禪師樣がお踊なさるそんなアノ御身分柄にもない 二「アヘ、、止めなさんなチヤンと踊らうと想ふて支度をして參つたのだ」と言ひながら包をひろげて取出すのを見ると

『晒しの浴衣に髑髏、黃金木綿の丸ダケに、紅木綿の手拭ぢや。』

紅「何でございます此れは、二「默つて見て居なさいソレ此浴衣を斯樣被てな 紅「ヘエーソレ此黃色の帶を斯樣結むで 二「ソレ此手拭で頭冠り、さア踊るのぢや見て御出」

『と言ふや、飛込む矢來の中、檀家連中はひた呆され、他の踊り子面

喰ふ、紅い手拭不思議な姿、トボケタ坊主が手を振つて、天地へ響けと大きな聲。』

一休禪師は一種奇妙な節で謡ひ出しました、

『竹を切るなら心せよ、溜りし水を溢すなよ手荒くしよなら濁らうぞ、切らず置なら出ず入らず、世に彌之助の袖の露、片々寄らず片寄らず、二合半酒に握り飯、辛氣辛苦の合藥、程に飲むならよいく、よいが、過ぜば毒となならうぞや、水は尾花を好むとか、もしも尾花と契るなら、淺く契りて末まで遂げよ、秋の紅葉は薄いが散るか、色の濃のが先に散る、人の眞似する鸚鵡でさへも、厭



な時なら眞似もせず、瀧の源尋ねて見なよ、晝はひねもす夜はよもすがら、飽かず休まず流れ合ふ、其白糸の細流れ、細く長いが業しみぢや、飲めや謳へや春の空、花を集めて奢るのぢや釋迦のお嬶、耶輸陀羅姫も、皮を包むだ糞袋、破るやうなる腹鼓、笛や太鼓の盆踊り貴所の御氣に入る樣に、猫も杓子も出て踊れ、南無阿彌陀佛阿彌陀佛ヨイ〳〵〳〵ヨイトサ』

是を繰返し〳〵、夢中になつて唄ひながら、出たらめの樣な深い意味のある樣な手つき足取をして踊り立てる、他の踊りの連中は皆手を止めて呆氣に取られて眺めて居る、鐘太鼓で囃子立て居る人等

も鳴らすのを止めて是も呆然として見て居ります、他が靜つたら彌〳〵禪師の聲は天地に響く、此時なりといふ見得でやつて居りますと先刻より致して不思議な事に思召されて居た將軍家は「コレ〳〵彼の赤い坊主は何ぢや」

## 二十二

元來頰冠りをして居るのでございますから、何者とも解らない赤い坊主と仰有つたも道理でございます、折角今が興に入つて皆が踊つて居ります中へ飛出して一人で踊り狂つて居るのでございますから將軍家は一方ならず御氣色を變へられた 將「何ぢや彼の赤い坊主は予の興を妨げる奴、誰ぞ取押へよ」との御諚ハッと答へた山名藏人下役人に下知なせば仰せ畏み五六人バラ〳〵と來る禪師の方矢來の外の檀家連スハ事なりと汗握る、禪師は一向平氣なもの、ヨイヨイヤと亦た踊る、

役甲「コレ坊主、上樣御上覽をも顧みず無禮であらう」 役乙「えゝッ止まらぬか」

「言ふ間もあらず禪師を捉へ、其儘引伴れ山名の前。」

山「コリャ坊主其方は何者だ、冠り物を脱らう」 ニ「ハイ〳〵」と頰

冠りを脱ぎました其時、

『顔をば見れば口ハ如何に、當時京都に誰あらう大徳寺の一休殿、

恩はず是はと山名藏人。』

山「コリヤ禪師殿でござつたか」と亦明いたほが塞がらない、禪師

は唯ヤ〳〵と笑つて居ります、そこで山名は其趣きを將軍へ申上

げると直ぐに將軍に於いても驚ろかれたが　將「これへ呼べ」の御言

葉、

『禪師は不思議な踊りの姿、澄したもので御前へ出る。』

將「オヽ禪師であつたか、何で踊りの妨げをするのぢや」「イヤ決



して妨げは致さぬつもり、彼も喜び我も喜ぶ樂しみの踊り倶に致し

ましたまで　將「ムヽ而して彼の唄は何の者ぢや　一「彼の唄の意味を

お尋ねでござりますか」

『莞爾笑まれた禪師には、其唄の意味に事寄せてイザ諫めんとなし

たる時、義持公は氣着かれしか、先刻の文句をおぼろげに繰て想ば

何とやら、其意味深き諭し草、實ては帝へ獻燈を諫めし事も聞き及

ぶ、コリヤ必らずに意見ぞと早くも悟り領きて。』

將「イヤ禪師、よい〳〵唄の意味は克く相解つた　一「申上ずともモ

ウ御解りでござるか、ウム流石は御名君に在せられる、彼の唄の意

味御合點が參らば、やがて斯樣たわいもなき盆踊りなど御廢止に相成らうと存じ上げる、モシ又此後盆踊りを、お望み遊ばすなら斯樣に民の間をかゝせずとも、慰僧御所へ罷り出で、何時にても御覽に入れる」と言つてヂロリと御側の方々の顏を見つ　「各々にも君盆踊り御所望とあらば早速大德寺へ御使者を向けられる樣御計ひなされとやつた。

「何れも癪な坊主とは、思ふたけれど一言ない、道は正しき其言葉下を助けて上をば諫む、義持公も詮方なく。」

將「禪師モウ盆踊りは望まぬぞ」



「と仰有つて其夜は直ぐと御歸館、禪師は思ふ事なりて、打喜びつゝ外へ出る、錢久紅屋は心配の如何なりゆくかと待つ折柄、其由聞きて今さらに、禪師が奇智に世へ盡す、其德高さを感じ入る。」

やがて其後此盆踊りの事も廢止の御沙汰、又しても京都は禪師の噂彌が上に其德は廣く相成ます、

「唯見れば何のたわいもあらずして、淪落て巫山戲で行く中に、敎へ諭の言底深き俗にまみれて俗脫の禪の妙味は出て猶、是から禪師の旅物語り。」

## 二十三

『茲に一休禪師には諸國漫遊思立つ、時に恰も新左衛門悴に世をば譲られて、我ての願ひの禪師の弟子、剃髮こそはなされども、俗に用無き隱居の身、此れ幸ひの道伴れと。』

「ナア新左衛門一ツ足まかせに諸國を巡つて見樣と思ふが何うだい　爲イヤ其れは面白い事でございます、是非お供を致したいもので　「ウムちや何時でも氣の向いた時に出掛樣な　爲エ、何時でも御氣の向いた時に鳥渡呼びに寄越て下されば直ぐ參ります　「アヽ



宜しいでは其つもりで」と約束は其れだけの事、何れ斯る人達でとざいますから出掛たら何年かゝるか知れませんが、鳥渡隣り村へでも行く樣な塩梅、處へ玄關より番僧が參りまして　番「申上げます、

「何ちや　番「只今伊勢國關の城主大貝濱之亟と云へる人の家臣長島德右衛門と申す者禪師樣へ御願ひの事有りとて見へましてございます　「ウム何か知らぬが會ふてやる此方へと申せ……イヤ新左衛門此頃は種々の者が參るよ　新「何れ皆禪師の御德を慕ふて參る事で　「アハヽヽヤ德を授けるも喧さい事ちやて」など言つて居りまする處へ、番僧の案内に入つて參りましたのを見るとハヤ六十路ば